

柔道科学研究

Scientific Research on Judo

第14号 2009

ゴールドスコアで戦える体へ—2008北京オリンピックへ向けた女子柔道のトレーニングの取組— ……	1
曾我部晋哉、有賀誠司、日蔭暢年、松岡義之、出口達也、酒井英幸、岡泉 茂、 田辺 勝、園田隆二、長井淳子、徳野和彦、阿武教子、林 弘典	
2008年ジュニアブロック合宿におけるトレーニング指導 ……	7
岡田 隆、山田利彦、有賀誠司、射手矢 岬、酒井英幸、持田達人、小嶋新太、 田辺 勝、山本洋祐	
欧州柔道選手と日本人学生柔道選手の柔道に関する意識の比較研究 ……	14
横山喬之、石川美久、竹澤総裕、仲田直樹、篠原信一	
世界柔道選手権大会における外国人選手の競技傾向—1995年と2005年の比較— ……	19
石川美久、横山喬之、竹澤総裕、鮫島康太、佐藤伸一郎、篠原信一	
資 料	
2008 International Judo Symposium on Sports Medicine and Science ……	24
— Medical and Scientific Aspect —	
柔道史年表 1956→1965 ……	34
渡邊昌史	

(財)全日本柔道連盟強化委員会情報戦略部
(旧 科学研究部)

ゴールドスコアで戦える体へ —2008北京オリンピックへ向けた女子柔道のトレーニングの取組—

曾我部晋哉¹⁾、有賀誠司²⁾、日蔭暢年³⁾、松岡義之³⁾、出口達也³⁾、酒井英幸³⁾、岡泉 茂³⁾、
田辺 勝³⁾、園田隆二³⁾、長井淳子³⁾、徳野和彦³⁾、阿武教子³⁾、林 弘典³⁾

【はじめに】

柔道の競技力向上には、主に技術の向上、精神面の強化、及び体力の向上が挙げられる。ストレングス・サポートでは、体力の向上及び怪我をしない体づくりのプログラムを通じて、世界で戦える身体を養成することが主たる目的となる。しかし、オリンピックチームを強化する場合においては、4年ごとに入れ替わる限られた時間の中で、獲得能力のうちどの要素を重点的に強化するか、最も効率の良い方法を分析し実践しなければならない。では、最も効率の良い方法というのは何か。1) 最も効果の上がるトレーニングを最短の時間で実施することということ、2) そのプログラムを実施したほぼ全員に効果があるということ、3) プログラムに参加する選手の全員が毎回全力で取り組めること、ということになる。この3点が満たされて効率的、つまり科学的トレーニングであるといえる。病気における薬の処方と同じで、ただ適当に投与すれば良いというものではない。効果が上がるようなトレーニングプログラムを作成しても、実際にトレーニングを実施時に多くの選手が80%程度の力しか出さず、100%の力を出しているふりをしていざすれば、最終的には結果が出ないことになる。その場合には、指導法が科学的ではないことになる。「このような場合には選手に声を掛けないと怪我をする。」「このような時に叱らないと力をださない。」と状況に応じて、対応する監督やコーチは、これまで指導してきた何百人もの選手の統計から、このような時は「こうすべきだ」と判断している。これは、コーチングにおける統計学であるとも考えられる。もし、その現場を一時的にみて「ただ走らせているだけだ。」「ただ怒鳴っているだけだ。」と判断するのは、全体像を把握していないために、間違った判断をしかねない。

トレーニングプログラムが選手に与える影響は非

常に大きい。それは、与えられた刺激に対して体が適応¹⁾してしまうからである。そのために、特にオリンピックにおいて金メダルを獲得するための体作りは責任が大きい。しかも限られた時間の中で、勝つための最も適した体に仕上げていくためには、当然ながら失敗は許されない。北京オリンピック女子柔道強化チームの日蔭監督の方針は、4年間一貫して基礎体力の向上、スタミナの養成であった。特にこのスタミナ養成は、筋力や柔軟性などの他の能力と比較して時間がかかる。柔軟性は2～3ヵ月での改善が可能であるが、筋力は約3ヵ月以上、持久力は約12ヵ月以上の時間を要する²⁾ ために、地味に見えるかもしれないが、一度決めたプログラムを継続して長期にわたり実施し、体の内部の心血管系、心肺機能、筋肉細胞、血液の状態などが変化する³⁾ まで根気強く待たなければならない。(ここでいうスタミナは、一定の速度で30分ないし1時間運動を継続する能力ではなく、5～10分の高強度の運動を5～7セット継続できる能力を指し、いわゆる柔道において決勝戦で戦えるまでのスタミナを指す)。そのため、年間の合宿に合わせた長期的なピリオダイゼーションモデル⁴⁾ (トレーニング計画)を作成し、選手の能力を評価しながら実施していく必要がある。ピリオダイゼーションを作成する前に、まず考えなければならないことは、先に述べたスタミナを養成するためには、どのようなトレーニングを実施すればよいかということになる。そのためには、柔道がどのような特徴のある競技なのかを分析しなければならない。

練習中の心拍数を調べた研究⁵⁾ では、練習2時間の間、心拍数は130拍/分～190拍/分に分布していることが多く、試合を想定した模擬試合では180拍/分を超える状態が多かったと報告している。つまり試合中は、ほぼ推定最高心拍数に達しており、身体に

1) 甲南大学、全日本女子柔道ストレングス・サポート 2) 東海大学、全日本柔道ストレングス・サポート
3) 全日本柔道連盟強化委員 (2008年執筆時)

大きな負荷が生じている。また、柔道は有酸素的な能力と無酸素的な能力の両方が利用されていると報告されているが、これまでの報告からも、どの能力が貢献しているかという見解はそれぞれ異なる。代謝的な面から考えると、5分間という限られた時間の中で、高強度の運動を継続するには、大きな力を発揮しながら蓄積した乳酸を上手く次のエネルギー源として利用できる能力が必要であると考えられる。そこで、全日本女子柔道のトレーニングでは、高強度の運動を継続するための能力の指標として、400m走、800m走のタイムを基準にできないかと考えた。400m走は無酸素性の運動が主であるとされており、エネルギー供給機構の貢献度はATP-CP系26.7%、乳酸系55.3%、有酸素系18.0%、また800m走は、ATP-CP系18.0%、乳酸系31.4%、有酸素系50.6%であると報告⁶⁾されている。高強度の力を発揮するには、血中グリコーゲンを原料とした乳酸系の能力を最大限に利用し、血中乳酸濃度を最大限に高め、そしてその乳酸を効率的にさらに原料として利用する能力^{7,8)}を獲得しなければならない。いわゆる血中乳酸濃度が高まることは、疲労しているというわけではなく、糖代謝が活発であることを表す。逆に血中乳酸値が低いことは、疲労していないのではなく、大きな力が出せないことを示唆している。実際に乳酸産生は、運動時の疲労の原因となるカリウムが筋から流出することを抑制するという報告⁹⁾もあり、これは乳酸ができることで疲労を抑制するともいえる。この体内に産生された乳酸をいかに利用できるかが、柔道のような高強度の運動を持続する運動の鍵になるといえる。

そこで、ここでは北京オリンピックに向けて「ゴールドメダルで戦える体へ」を目的に、実施してきたトレーニングの結果を400m走、及び800m走のタイムから報告する。

【方法：プログラム】

2008年度強化選手に選出された強化A、Bのうち、有効な記録として扱える28名を対象とした。2008年5月から7月にかけては、オリンピック前の最終トレーニング期間であり、4年間のトレーニングサイクル及び1年間のサイクルにおける最後の時期にあたる。そのため身体能力を高めるための仕上げの時

期であると同時に、最も重要な時期であるといえる。オリンピック開催に向け、「ゴールドメダルで戦える体」づくりを目指し、特にスタミナを養成するトレーニング（特に血中乳酸濃度が最も高くなるであろうと考えられるプログラム）を計画・導入した（写真1）。神経系に刺激を与えるためのトレ



写真1 トレーニングプログラム実施中の女子強化選手

ニングや身体の安定化プログラムも実施したが、本稿ではスタミナ養成（ゴールドメダル対策）のプログラムにおける結果に焦点をあてる。以下の3プログラムを基本プログラムとし、各合宿時に導入した。トレーニング効果を確認するために、第2回強化合宿時と第5回強化合宿時に400m走と800m走のタイムを記録した。タイムをそれぞれの階級で平均化し、第2回と第5回の記録を階級ごとに比較した。各選手のタイムが5月～7月にかけて改善したかどうかを統計的に確認するために、対応のあるt検定を行い、危険率5%水準で判定した。

<対象トレーニング期間>

第2回全日本女子強化合宿：5月19日～5月24日
：400m走、800m走の記録測定

第3回全日本女子強化合宿：6月11日～6月19日

第4回全日本女子強化合宿：6月30日～7月5日

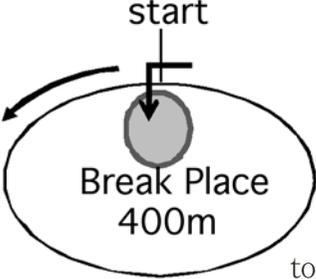
第5回全日本女子強化合宿：7月21日～7月26日
：400m走、800m走の記録測定

<プログラム内容>

Program 1 では、血中グリコーゲンの利用を促すために、筋に負荷を与える補強運動と循環器系への負荷を考えたトレーニングを組み合わせ、解糖系を最も利用するためのプログラムを実施した。

● 【Program 1】：筋への高乳酸蓄積トレーニング

①補強トレーニング（スクワット×20、プッシュアップ×20 etc.）
↓
②400mスプリント×1周……既定されたタイムをこなす
↓
③15秒のレスト
↓
次のセットへ（①～③）を繰り返す



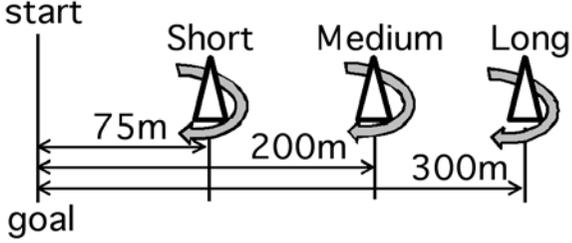
total : 5 set

Program 2 では、高強度の運動の継続により蓄積した乳酸をエネルギー源として利用できるように3段階に距離を短くしていき、血中グリコーゲンを短時間で枯渇させるように心がけた。

● 【Program 2】：乳酸利用能促進トレーニング①

Prep：図のようにコーンを配置する。

①start地点からLongコーンを往復（600m）……既定されたタイムをこなす
↓
②30秒のレスト
↓
③start地点からMediumコーンを往復（400m）……既定されたタイムをこなす
↓
④30秒のレスト
↓
⑤start地点からShortコーンを往復（150m）……既定されたタイムをこなす

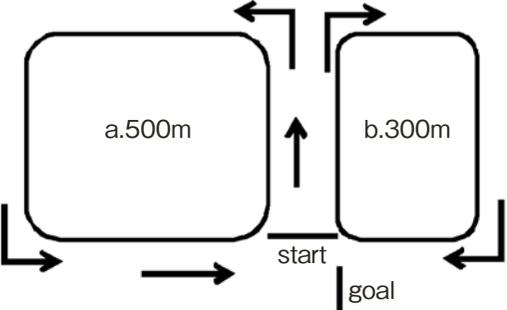


total : 3 set

Program 3 では、目的はProgram 2 と同じであるが、距離を3段階に短くせず、乳酸をエネルギー源として利用して、ペースを維持できるような能力を養成するプログラムとした（ゴールデンスコアにおいてもペースダウンせずに戦えるように）。

● 【Program 3】：乳酸利用能促進トレーニング②

①500mスプリント×1周
↓
②30秒のレスト
↓
③300mスプリント×1周
↓
④15秒のレスト
↓
⑤300mスプリント×1周



total : 3 set

【結果：記録の比較】

400mと800m走のタイムを、第2回全日本強化合宿時と第5回全日本強化合宿時を比較した。表1、図1に記録の変化を示す。すべての階級において、5月の測定時から7月の測定時にかけてタイムが短縮した。また、各選手の5月から7月の記録の変化も数名を除き、すべての選手においてタイムが短縮し、有意差がみられた ($p=0.0007$)。同様に800mの記録を表2、図2に示す。800m走のタイムも400m走同様、5月の測定時から7月の測定時にかけてタイムが短縮した。また、各選手の記録も5月から7月にかけて有意にタイムが短縮した ($p<0.0001$)。800m走における78kg超級の記録については、5月と7月に連続して測定できる選手が少なかったこと、及び選手間の差が大きいことから結果から除外した。

表1. 第2回合宿時と第5回合宿時の400m走のタイム

	5月23日	7月23日	Difference
48kg	83.7±6.4	77±2.0	6.7
52kg	85±9.1	77.6±5.1	7.4
57kg	79.8±4.8	77.2±5.3	2.6
63kg	83.3±3.1	79.8±3.1	3.5
70kg	80.8±3.5	78.6±3.5	4.5
78kg	86.7±6.7	85.5±6.0	3.5
+78kg	127.5±10.6	100.3±6.4	27.2

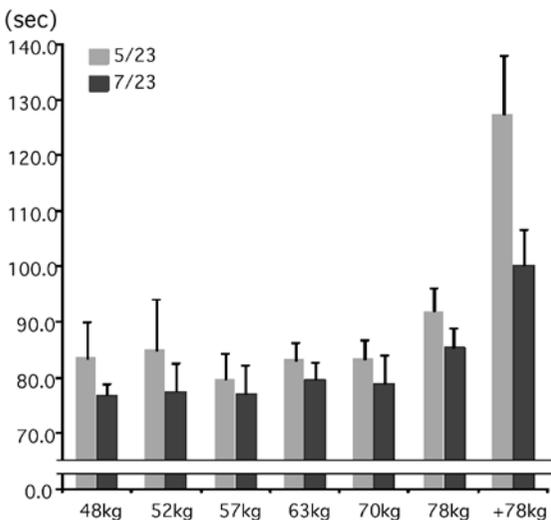


図1. 第2回合宿時と第5回合宿時の400m走のタイムの比較

表2 第2回合宿時と第5回合宿時の800m走のタイム

	5月23日	7月23日	Difference
48kg	190.0±21.9	176.8±6.3	13.3
52kg	189.0±22.0	178.0±14.1	11.0
57kg	190.2±6.7	185.8±10.7	4.4
63kg	195.0±4.4	189.8±7.2	5.2
70kg	191.6±8.4	189.8±8.4	1.8
78kg	202.8±19.2	199.2±17.7	3.6

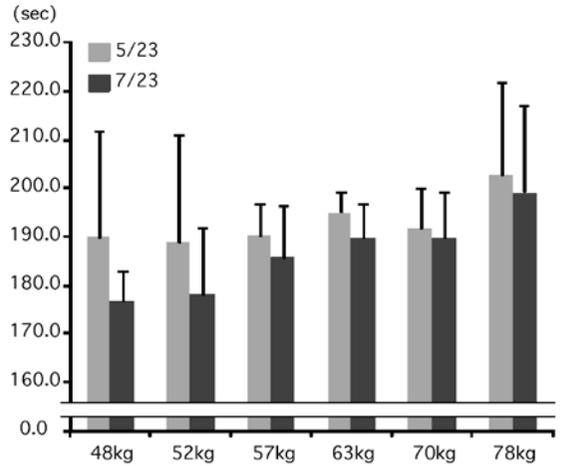


図2. 第2回合宿時と第5回合宿時の800m走のタイムの比較

【考察】

陸上競技では、400mを専門とする選手の中には、100mや200mを得意とするタイプと、800mも走ることのできる持久的なタイプの選手が混在するという¹⁰¹⁾。実際に、個人別にデータを追跡していくと、400mが速くても800mのタイムでは中間位であったり、また逆の場合もある。しかし、測定データを注意深く観察すると、代表に選出される選手やその近いポジションにいる選手は、階級に関わらず両方のタイムが上位に位置した。また、400mでは比較的よい記録をだせるのに、800mでは中軽量級にもかかわらず下位に位置する選手もいた。400mの2倍となる800mでは、自分で限界を作ってしまうのか精神的に持続することが困難なことが原因に挙げられる。やはり、そのように400mと800mの記録に大きな差があったり、測定日によって記録にばらつきが大きい選手は、強化選手として定着することが難しいように思える。

ここで、ひとつトレーニングについて論じなければならぬことがある。よく科学的トレーニング、

非科学的トレーニングと分けて述べられることがある。では、科学的トレーニングとは何か。一般人の持つイメージは、最も楽な方法で最も効果が上がり、かつ最新の器具を使ったものというものはなからうか。例えば競技力を向上させるためのある種の薬を摂取すれば、一時的に何らかの適応が現れる。これはいわゆるドーピングであり、非合法である。確かにこれは、科学的な競技力向上の一つである。では、何の最終獲得目的もなく、日々適当なトレーニングプログラムを数時間実施する。これは、科学的かといえば明らかに非科学的トレーニングであるといえる。しかし、ある種の目的を持って、最も厳しいトレーニングを定期的実施すること、これは科学的であるといえる。科学的というのは、先人が、この方法を実施すれば効果があるということを実証してくれたものにすぎない。だから、目的に合致しないものは省いて、必要なものだけを集中して行わせることになる。そのため、科学的トレーニングは、これまで経験のない人にとっては身体的にも精神的にも厳しいものになる。いわゆる科学的トレーニングといわれるものの恩恵を受けるためには、多少苦しくても耐えうる精神力がなければならない。その精神力を養成するために、厳しいトレーニングと稽古をする、長時間の稽古をする、これは理にかなった科学であると思う。全日本合宿で実施しているようなトレーニングを競技力の低いところで同じように実施すれば、多くの選手が辞めてしまうだろう。しかし、我々が目指しているのはオリンピックの頂点であり、一流の選手を預かっている合宿において、普通の選手が簡単にこなしてしまうプログラムでは更に上のステージへの身体の適応は望めない。1秒以下の記録を競う陸上競技はトレーニング方法が重要であり、低強度のトレーニングにおける血中乳酸濃度が低下するという現象は比較的短時間で影響が現れるため、注意が必要であると警告されている¹²⁾。トレーニング科学最前線のアメリカにおいても、まだトレーニング全容を明らかにするには発展途中であると言ってよい。そのため、現在日本では主流となっているアメリカで発展したトレーニング科学を応用するには、特に日本で生まれた競技である柔道には限界がある。そのため、柔道はこれまで多くのトレーニング科学者達が明らかに

してきた理論を応用し、そして試しながら独自のトレーニング方法を展開し開発していかなければならないのではないかと考える。

【おわりに】

2008年北京オリンピック(8月9日~15日:Beijin)では、全日本女子柔道代表チームは、金メダル2個、銀メダル1個、銅メダル2個、合計5個のメダルを獲得し、メダル獲得数では世界トップであった(CHN:4、CUB:4、NED:3、FRA:2)。また、その直後の10月5日(日)東京武道館において行われた世界柔道団体選手権大会では、決勝戦までの3試合のうち、総勝ち数16、負け1という成績で優勝した。これらの結果についての総評は、諸家が述べられている通りであり、ここでの言及は避けたい。柔道の競技力におけるトレーニング成果の占める割合は、実際はどの程度かは分からない。柔道の技術をサポートし、身体的な能力を向上させるであろうことは分かる。しかし、柔道において勝負で勝つには、技術と身体能力が優れているだけでは勝てないことは周知の通りである。そのため、トレーニングによってここまで強化したから必ずしも勝てるという訳ではない。つまり柔道におけるトレーニングは、目的はあってもゴールがないといえる。トレーニングを実施する選手自身で、生理的限界(これ以上続けると生命が絶たれる)に、いかに近づけるところまで追い込めるかということが重要な要素のひとつになる(写真2)。このようなことを考



写真2 砂浜を利用したトレーニングで自分自身を追い込む選手(第3回強化合宿)

えていると、やはりトレーニングの最終目標は、身体を強化する目的であっても精神力が鍛えられるものでなければならないと感じる。考察において科学的ト

レーニングについて述べてきたが、つまり、科学的トレーニングとは、身体能力が改善されることが証明された方法を利用することにより、勝負に勝つための根性と忍耐力を向上させることである、といえるのではないだろうか。

【謝 辞】

全日本女子柔道の日蔭暢年監督には、北京オリンピックまでの間、ストレングスやコンディショニングに関して自由に計画・実施させて頂き、本当に感謝しております。うまくチームがまとまるよういつも考えて下さった松岡先生、トレーニングの大切さを選手に伝えて頂いた酒井コーチ、様々なディスカッションをさせて頂いた岡泉コーチ、朝のトレーニングで一緒に厳しく指導して頂いた園田コーチ、いつも陰ながらサポートしてくれた林コーチ、またジュニア担当のコーチの先生方にも大変お世話になりました。また、この機会を頂きました有賀先生には、本当に感謝しております。先生方のご協力とお心づかいのおかげで、より良いトレーニングができたのではないかと思います。最後に、いつも大変なトレーニングを一生懸命にこなしてくれた強化選手の皆には、深い敬意を表すと同時に本当に感謝しています。

参考文献

- 1) Arnold MD *et al.* Accuracy of predicting bench press and squat performance from repetitions at low and high intensity. *J Strength Cond Res.* 1995;(9):205-206.
- 2) Ozolin N. *Sovermennaiia sistema sportivnoi trenirovki.* Moscow. Fizikultura i Sport. 1971.
- 3) Astrand P and Rodahl K. *Textbook of work physiology.* NY McGraw-Hill. 1970.
- 4) Matveyev LP. *Periodization of sport training.* Moscow. Fisultura i Sport. 1966.
- 5) 中村良三ら：練習時、模擬試合時の心拍数変動.日本体育協会スポーツ科学研究報告競技種目別競技力向上に関する研究第1報.1977.61-75.
- 6) Mader A. Personal communication with author. Vancouver, British Columbia. 1985.
- 7) Brooks GA. Intra- and extra-cellular lactate shuttles. 1: *Med Sci Sports Exerc.* 2000 ;32 (4):790-9.
- 8) Allen D and Westerblad H. *Physiology. Lactic acid-the latest performance-enhancing drug.* Science. 2004 ;(20):1144-7.
- 9) Nielsen OB *et al.* Protective effects of lactic acid on force production in rat skeletal muscle. *J Physiol.* 2001;(536):161-6.
- 10) 持田 尚ら：日本一流男子ジュニア400m走競技者のアネロビックパワー発揮特性について.陸上競技紀要. 2006;(2):162-167.
- 11) 持田 尚：血中乳酸濃度動態に着目して400m走能力の評価を実験室テストから試みるージュニア400m走競技者の競技力発達と間欠的ランニングテストのパフォーマンス変化からー. スプリント研究. 2006;(16):1-8.
- 12) 八田秀雄 編著：乳酸をどう生かすか. 杏林書院, 東京. 2008.p103.

2008年ジュニアブロック合宿におけるトレーニング指導

岡田 隆^{1) 2)}、山田利彦¹⁾、有賀誠司³⁾、射手矢 岬⁴⁾、酒井英幸⁵⁾、持田達人⁶⁾、小嶋新太⁷⁾、
田辺 勝⁷⁾、山本洋祐⁷⁾

はじめに

2008年10月16～19日に、高知県南国市スポーツセンターにて開催された中四国ジュニアブロック合宿において、トレーニング指導をする機会を与えていただいたので、ここに報告する。

1. 敏捷性のトレーニング

(1) トレーニングの適時性と成長期のトレーニング

スポーツ活動においては、最大筋力、筋持久力、筋パワー、全身持久力、敏捷性など様々な体力要素が競技力に影響を与える。トレーニングには適時性の原理があり、発育発達段階に応じて効率よく強化できる体力要素を考慮し、それに対して最適な刺激が与えられるトレーニングを行なうことが重要である¹⁾。

今回の指導対象は中学生が主体であるため、中学生の発育発達に適したトレーニング処方が必要となる。中学生期では動きの巧みさを養うトレーニングが重要である¹⁾。このトレーニングで重要な体力要素は敏捷性 (agility) であり、体の一部あるいは全部を、ある方向に素早く動かすことのできる能力と定義され²⁾、神経系の要因が強く関わっていると考えられる。敏捷性を高めるトレーニングはアジリティ・ドリルと呼ばれ、比較的速いスピードで行なわれることが多い。したがってその基礎を築くために、遅いスピードや静的な状態で実施するトレーニングが先行あるいは並行して行なわれることが多いが、今回のトレーニング指導では速いスピードで行うアジリティ・ドリルに重点を置いて指導に当たった。

(2) 下肢の敏捷性を高めるトレーニング

ラダー (縄梯子) や畳の縁を利用し、それを素早く飛び越える動作を繰り返し行なう (写真1-5)。ただ早ければ良いというわけではなく、自分がイメージした動きを正確に実施することが重要である。下肢の動きに伴って体幹を含めた上体が動揺す

るので、それを抑えながら行なうことで上半身と下半身の効率の良い運動も学習される。立ち技における足の捌きにつながるトレーニングである。

(3) 全身の敏捷性を高めるトレーニング

指導者の合図に従って、素早く正確に身体を動かす。選手はその場でステップし、指導者はランダムに左右の手を挙げる。それに応じて、左あるいは右のツイスト (写真6)、左あるいは右のパーピーを実施する (写真7)。ランダムに出されるそれぞれの合図に対応した動作を適切に実施することは、様々な局面が不規則に訪れても適切に処理する能力を向上させるトレーニングとなり、相手選手の不規則な動きに実際に対応するためのステップとなる。

2. 道場でできる体幹のトレーニング

(1) 体幹トレーニングの考え方

体幹は強い受け、力強い技をかけるために非常に重要な部位である。体幹だけではなく、下肢や上肢も適切に強化されていなければ総合的に強くなることはあり得ないが、体幹は構造が複雑であり、正しくトレーニングすることが専門家でも限り難しいという背景があるため、指導上では特に重要となる。中学生のように正しいトレーニング方法を覚えるべき時期に、この複雑な体幹部のトレーニングを学習することは非常に効果が高いと考える。

体幹を構成する脊柱は縦に26個もの骨が並んだ構造であるため、安定性はそもそも高くないと考えられる。この不安定性が腰痛やパフォーマンス低下の原因の一つとなる。しかしこれは別の観方をすれば、様々な方向に自由に動くために必要な機構とも言える。したがって、運動の局面に応じて安定させる (固定する)、あるいはダイナミックに動かすという使い分けが重要になる。

柔道において体幹を固定する局面は、技の受けや組み手を切られないようにするときなどが考えられ

1) 了徳寺大学 健康科学部 整復医療・トレーナー学科、2) 東京大学大学院 総合文化研究科 身体運動科学研究室、3) 東海大学 スポーツ医科学研究所、4) 東京学芸大学 教育学部 健康・スポーツ科学講座、5) 自衛隊体育学校、6) 警視庁、7) 日本体育大学 運動方法 (柔道) 研究室

る。体幹をダイナミックに動かす局面は、技を施すとき、組手を切るとき、抑え技をブリッジで返すときなどが該当する。このように柔道では体幹を固定することも大きく動かすことも重要であるため、両方の使い方ともトレーニングしておく必要がある。今回は体幹を固定することに焦点を当てて解説する。

(2)基本姿勢の習得

写真8の姿勢は非常に安定性が高く、パワーポジションと言われる。この姿勢では脊柱は通常のS字弯曲を保っており、脊柱が受傷する危険性も少ない。まずはこの基本姿勢を徹底的に学習させ、この後に展開されるトレーニングをより効率の良いものとし、また脊柱が受傷するリスクを軽減させることが重要である。

(3)体幹筋肥大による筋力増強を促すトレーニング

スポーツ動作において体幹は固定して使われることも多い³⁾。したがってスタビリティトレーニングなどと呼ばれる固定するためのトレーニングが注目を浴びている。しかし固定しているのは筋力であるため、固定するという行為がいくら上達しても筋力が弱ければ、強い外力を受けたときには固定しきれずに体幹が動かされてしまう(崩されてしまう)。したがって筋力そのものを効率よく高める必要がある。

筋の基本的な性質として、最大筋力は筋断面積に比例する⁴⁾。したがって、体幹筋であっても最大筋力を高めるためには筋肥大させる必要がある。また筋には、固定したまま行なうトレーニング、すなわちアイソメトリックトレーニングでは肥大が促しにくいという性質がある。短縮性収縮と伸張性収縮を繰り返すアイソトニックトレーニングは筋肥大を促しやすいため、体幹筋を大きく動かして行なうトレーニングも重要となる(写真9、10)。

(4)体幹固定を学習するためのトレーニング

写真11は体の後方から加わる力に対して体幹を固定するトレーニングである。さらに側方からの外力(写真12)、前方からの外力に対して固定するトレーニング(写真13)を行なう。(1)で学習した体幹の基本姿勢(S字弯曲)を常に保てるように行なう。これらは数十秒間保持するように行なう。

これらのトレーニングの発展として、体幹を固定したまま他の関節を自由に扱える能力を養成するドリルがある。写真の状態を保持したまま脚や腕を

動かす(写真14)。このドリルでは、一方の腕や脚を動かすため、体幹に回旋する力が加わることになる。また支持基底面が減少するため不安定な状態となる。このような状況でも姿勢を維持することがトレーニング効果につながる。

写真15は立位で外力を受けたときでも基本姿勢を崩さないようにするためのトレーニングである。基本姿勢をつくり、パートナーは体幹に抱きついて体を一周する。前後左右全て方向の外力に対して、実際の柔道と同じ立位姿勢で抵抗することになり、より実践的なトレーニングとなる。

終わりに

今回は、中学生を対象とした敏捷性と体幹のトレーニングの指導に関して報告した。中学生期には敏捷性が高まるように、トレーニングという形式にこだわらず、今まで行なったことのない動きに積極的に取り組んでいただきたい。

昨今では、体幹とその周辺はコアと表現され高い注目を集めている。しかし体幹のみを強化すればよいわけではなく、腕も脚も強化しなければ競技力向上には結びつかない。目新しいトレーニングに執着するのではなく、全身をくまなく地道に強化する気持ちを持ってトレーニングに臨んでいただきたい。

参考文献

- 1) 日本体育協会編. 公認スポーツ養成テキスト I. 東京, 日本体育協会, 2005.
- 2) 石井直方総監修. トレーニング用語辞典. 東京, 森永製菓株式会社健康事業部, 2001.
- 3) 岡田 隆. 腰痛予防大研究 小さな背筋に注目!「多裂筋」の機能とコンディショニング. トレーニングマガジン, 2009;6:46-54.
- 4) Thomas R. Baechle, Roger W. Earle編, 石井直方総監修, 長谷川 裕, 岡田純一監修. NSCA 決定版 ストレングストレーニング&コンディショニング 第二版. 東京, ブックハウス HD, 2002.



写真1 前後ジャンプ

素早く正確に前後にジャンプすることを繰り返す。



写真2 左右ジャンプ

素早く正確に左右にジャンプすることを繰り返す。



写真3 片足ジャンプ

前後ジャンプ、左右ジャンプを片足で行なう。左右ジャンプで外側に向かってジャンプするときには、足関節捻挫に注意する。



写真4 クロスカントリー

幅のある障害物をまたいで立ち、ジャンプして脚を前後に踏みかえる。大きく動くことで体幹が回旋されるため、体幹のトレーニングにもなる。



写真5 ツイストジャンプ

ジャンプ中にツイストをして脚を踏みかえる。大きく素早く動かすことで体幹への刺激が高まる。



写真6 ステッピング→ランダムツイスト

指導者と正対して選手はステッピングをする。指導者のランダムな左右の合図に対応して左右にツイストする。

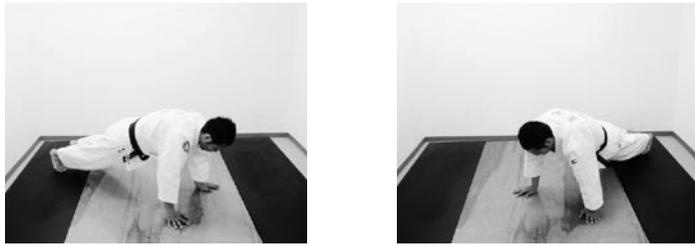


写真7 ステッピング→ランダムバーピー
写真6と同様にステッピングを行い左右にバーピーを行なう。



写真8 体幹の基本姿勢の学習
膝に手を当て、腕を突っ張る。この状態で胸が張れたら膝に当てた手を離し、この姿勢を学習する。



写真9 体幹筋の肥大を目的としたトレーニング1
相手の体幹に脚をからめ、上体を巻き込むように丸めて腹筋群を刺激する。大きな可動域を確保して行なうことが筋肥大にとって重要な刺激となる。強度を増す場合には手を頭の後ろで組むか、ウエイトのプレートなどを抱えて行う。



写真10 体幹筋の肥大を目的としたトレーニング2
写真9に回旋を加えることで、腹斜筋群への刺激が高まる。



写真11 ブリッジ
肩から膝までが一直線になるところで保持する。



写真12 サイドブリッジ
足首から肩までが一直線になるところで保持する。



写真13 フロントブリッジ

足首から肩までが一直線になるところで保持する。



写真14 体幹固定からの発展
脚や腕を動かし、その状態で
体幹を保持する。



写真15 基本姿勢の強化

立位で前後左右全ての方向からの外力に抵抗して姿勢を保持することで、より実践的なトレーニングとなる。膝についての手を離して行なうことでより難易度が増す。

(撮影協力: 了徳寺大学 助手 小玉京士朗, 同柔道部 及川 諒)

欧州柔道選手と日本人学生柔道選手の柔道に関する意識の比較研究

横山喬之¹⁾、石川美久²⁾、竹澤稔裕³⁾、仲田直樹⁴⁾、篠原信一⁵⁾

A comparison study on the perception of Judo between European and Japanese university judo athletes Takayuki YOKOYAMA, Yoshihisa ISHIKAWA, Toshihiro TAKEZAWA, Naoki NAKATA, Shinichi SHINOHARA

This thesis paper studies the difference in perceptions of Judo amongst potential European and Japanese Judo athletes participating in the Universiade. The research analyzes the influence of the Judo environment, culture and racial differences on perception of Judo amongst the above subject group. The analysis methods used were the factor analysis and variance analysis. For the factor analysis method, five factors were extracted, namely: effort or skill factor, national or traditional sport factor, pure mind factor, negation feelings factor and competition entertainment factor. The common factor was an effort skill factor when I performed the analysis of variance. In addition, the perception of the European Judo player is more molded by the pure mind factor and the competition entertainment, while the perception of the Japanese Judo athlete is more likely to be influenced by the national sport tradition factor and negation feelings factor. In other words it was suggested that the European Judo athlete considered Judo more as a sport, while the Japanese counterpart regarded Judo more as a form of martial art.

【緒言】

柔道は、日本発祥の国際的なスポーツである。国際化の原点に立つと、欧州諸国が出発点であった。欧州諸国において柔道は普及し、1948年、イギリス、フランス、イタリア、オランダの柔道関係者は、ヨーロッパ柔道連盟を発足している¹⁾。1949年に全日本柔道連盟が発足していることから、欧州における柔道の組織化は顕著である。このような欧州諸国の柔道に対する受容の背景には、フランスにおける川石の普及活動²⁾や多くの講道館門下生による柔道指導が、今日の欧州柔道の発展につながっていると考えられる。

さて、欧州諸国における異文化の発展について、M・ウェーバー³⁾は「西洋という地盤において、またそこにおいてのみ、普遍的な意義と妥当性をもつような発展傾向をとる—と少なくともわれわれは考えたい—文化的諸現象が姿を現すことになった」と述べている。また、欧州人の文化について、E・W・サイード⁴⁾は「非ヨーロッパのあらゆる民族・文化を凌駕するもの」と述べている。つまり、欧州諸国の人々にとって、欧州文化は、いかなる文化よりも超越しているものと捉えられている。よって伝来した異文化は、年月を経ることで、欧州諸国の文

化性・民族性に沿う発展をたどることが伺える。この考えに従えば、欧州諸国に伝来された柔道が、欧州文化に沿う形で発展していると結び付けることができる。例えば、日本では、「身体方面および精神的方面」からの柔道の教育的効果⁵⁾を認めているため、学校体育の中に取り入れ、主に部活動として、柔道が行われている。一方、欧州諸国では、クラブスポーツの一つとして普及している。これは、欧州諸国における柔道が、スポーツという形で発展していることを示唆する。

このような違いは、柔道を行う人々の意識に影響しているのであろうか。村田⁶⁾が「国際化の内実とそれが招来する社会の実相や人びとの物の考え方の変化などを、しかも結果として生じる変化がわれわれの求めているものであるかという価値判断も伴わせて明らかにしていく必要は十分にある」と述べているように、国際化の著しい柔道において、欧州諸国の柔道選手の意識を明らかにすることは、興味のもてるものであろう。

そこで、本研究では、欧州諸国と日本の柔道選手を対象として、柔道に関する意識を明らかにすることを目的とした。

1) Pedro's Judo Center 2) 筑波大学 3) 関東学園大学 4) 仙台大学 5) 天理大学

【方法】

(1)調査期間

調査は、2008年5月15日～10月20日に行った。

(2)調査対象者

本研究の調査対象者は、欧州柔道選手および日本人学生柔道選手である。

調査対象となる母集団の年齢設定をユニバーシアード大会への参加可能な年齢（開催される年の1月1日現在で17歳以上28歳未満）とした。

(3)調査方法

日本人学生柔道選手は、無作為に選出した大学に調査用紙を郵送した。また、欧州柔道選手は、郵送による調査、あるいは筑波大学に來学する欧州柔道選手および講道館に來館する欧州柔道選手に調査用紙の記入を依頼した。

欧州柔道選手の調査数は150名であった。日本人学生柔道選手は494名であった。

(4)調査用紙

船越らの先行研究において用いられている50設問からなる調査用紙を使用した。また、回答は5段階評定尺度により行った。

(5)分析

(5)-1. 因子分析

本研究は、欧州柔道選手150名、日本人学生柔道選手494名、計644名の回答した設問に対して因子分析を行い、そこから抽出された因子を基に比較を進めることとした。

データベース作成後、SPSS (Statistical Package for the Social Science) 10.0 for Windowsに移した。分析は、主因子法からNormal Varimaxによる直交回転を施し、因子を求めた。

一度目の因子分析により、13因子を得ることができた。しかし、13因子の中には、因子負荷量0.40以下の設問を含んでいたため、因子負荷量0.40以下の設問をカットした。その結果、25設問が対象設問となった。二度目の因子分析によって、固有値1.0、累積寄与分散44.30%の下、解釈可能な5因子を得ることができた。

(5)-2. t検定

(5)-2-1. 5段階評定尺度における各設問の比較

因子分析により、5因子が抽出され、各因子に寄与した設問を欧州柔道選手と日本人学生柔道選手でt

検定を行った。

(5)-2-2. 欧州柔道選手と日本人学生柔道選手の因子スコアによる比較

5因子を抽出後、欧州柔道選手と日本人学生柔道選手の因子スコアを算出した。算出した因子スコアを基に、欧州柔道選手と日本人学生柔道選手でt検定を行った。

【結果】

(1)因子分析

第1因子

該当した設問は、「柔道は努力の積み重ねが大切である」(0.70)、「柔道の技が決まったときは、スカッとすする」(0.69)、「柔道は真剣なものである」(0.62)、「柔道では自分にあった技を身につけることが大切である」(0.61)、「柔道は試練を越えて自らを鍛えるものである」(0.60)、「柔道はいろいろな技があってすごいと思う」(0.57)、「柔道は自分の好きなもの、やりたいものの一つである」(0.46)の7設問であった。

これらの設問から、柔道は努力し、厳しい試練を乗り越えることにより技術を習得できるものと捉えていると解釈し、第1因子を「努力技能因子」と命名した。

第2因子

該当した設問は、「柔道は日本の国技と考えてよい」(0.79)、「柔道は日本で古くから伝えられてきた大切なものである」(0.71)、「柔道は日本人の心を表す」(0.67)、「柔道は現代において大切なものである」(0.56)、「柔道は日本の国を強くする」(0.51)の5設問であった。

これらの設問から、柔道は国を代表する競技に位置付けられ、伝統的なものとして捉えられていると解釈し、第2因子を「国技伝統因子」と命名した。

第3因子

該当した設問は、「柔道は真の勇気を養う」(0.62)、「柔道は人生と同じである」(0.61)、「柔道は平和のために役立つ」(0.56)、「柔道は正義であり、正しく生きることを教える」(0.53)、「柔道は精神を集中するのによい」(0.46)、「柔道をすることは自分の喜びである」(0.43)の6設問であった。

これらの設問から、柔道は勇気、正義という善い精神の育成につながり、善に対する気持ちの感情が

あらわれてくると解釈し、第3因子を「純粹精神因子」と命名した。

第4因子

該当した設問は、「柔道は恐ろしいものである」(0.68)、「柔道はこわい印象を与える」(0.58)、「柔道は野蛮なものである」(0.58)、「柔道は陰気なものである」(0.54)、「柔道は古くさいものである」(0.51)の5設問であった。

これらの設問から、柔道からイメージされることは、恐ろしい、こわい、野蛮、陰気、古いという、

流行とは正反対の否定的に捉えられていると解釈し、第4因子を「否定感情因子」と命名した。

第5因子

該当した設問は、「柔道は他のスポーツと同じように楽しくやった方がよい」(0.66)、「柔道はスポーツと考えるべきである」(0.50)の2設問であった。

これらの設問から、柔道は、相手を投げて勝利を目指すというスポーツ的な要素を多く含んだものである。また、楽しく行っていくものと捉えられていると解釈し、第5因子を「競技娯楽因子」と命名した。

(2) t 検定

(2)-1. 5段階評価尺度における各設問の比較

第1因子：努力技能因子

表1 努力技能因子における各設問の比較

第1因子：努力技能因子		欧州柔道選手 n=150	日本人学生柔道選手 n=494	t 値
問44	柔道は努力の積み重ねが大切である	4.54(0.06)	4.54(0.04)	0.04
問43	柔道の技が決まったときは、スカッとする	4.45(0.07)	4.59(0.03)	1.79
問23	柔道は真剣なものである	4.52(0.05)	4.44(0.04)	1.13
問39	柔道では自分にあった技を身につけることが大切である	4.22(0.07)	4.34(0.04)	1.57
問38	柔道は試練を越えて自らを鍛えるものである	4.76(0.04)	4.29(0.04)	6.85**
問24	柔道にはいろいろな技があってすごいと思う	4.39(0.06)	4.38(0.04)	0.17
問36	柔道は自分の好きなもの、やりたいものの一つである	4.77(0.04)	4.04(0.05)	8.39**
合計の平均値		4.52(0.02)	4.37(0.01)	5.09

nは人数 ()内は標準誤差 **p < 0.01

第2因子：国技伝統因子

表2 国技伝統因子における各設問の比較

第2因子：国技伝統因子		欧州柔道選手 n=150	日本人学生柔道選手 n=494	t 値
問11	柔道は日本の国技と考えてよい	2.22(0.12)	4.39(0.04)	22.21**
問33	柔道は日本で古くから伝えられてきた大切なものである	2.49(0.11)	4.32(0.04)	19.62**
問7	柔道は日本人の心を表す	2.61(0.08)	3.89(0.04)	13.67**
問3	柔道は現代において大切なものである	3.11(0.08)	4.02(0.04)	10.44**
問29	柔道は日本の国を強くする	2.37(0.09)	3.45(0.05)	10.84**
合計の平均値		2.56(0.05)	4.01(0.02)	33.21**

nは人数 ()内は標準誤差 **p < 0.01

第3因子：純粹精神因子

表3 純粹精神因子における各設問の比較

第3因子：純粹精神因子		欧州柔道選手 n=150	日本人学生柔道選手 n=494	t 値
問14	柔道は真の勇気を養う	4.31(0.06)	3.88(0.04)	5.31**
問17	柔道は人生と同じである	4.26(0.07)	3.50(0.05)	7.96**
問13	柔道は平和のために役立つ	3.39(0.08)	3.44(0.05)	0.51
問48	柔道は正義であり、正しく生きることを教える	3.99(0.08)	3.81(0.05)	2.01
問49	柔道は精神を集中するのによい	4.60(0.05)	4.19(0.04)	5.45**
問42	柔道をすることは自分の喜びである	4.53(0.06)	3.77(0.05)	8.45**
合計の平均値		4.18(0.03)	3.79(0.02)	11.05

nは人数 ()内は標準誤差 **p < 0.01

第4因子：否定感情因子

表4 否定感情因子における各設問の比較

第4因子：否定感情因子		欧州柔道選手 n=150	日本人学生柔道選手 n=494	t 値
問20	柔道は恐ろしいものである	1.59(0.06)	3.37(0.06)	16.58**
問25	柔道はこわい印象を与える	2.39(0.09)	3.49(0.05)	10.38**
問10	柔道は野蛮なものである	1.71(0.08)	2.68(0.06)	8.67**
問45	柔道は陰気なものである	1.63(0.08)	2.73(0.05)	10.28**
問15	柔道は古くさいものである	2.16(0.09)	2.61(0.05)	4.51**
合計の平均値		1.90(0.04)	2.92(0.02)	21.56**

nは人数 ()内は標準誤差 **p < 0.01

第5因子：競技娯楽因子

表5 競技娯楽因子における各設問の比較

第5因子：競技娯楽因子		欧州柔道選手 n=150	日本人学生柔道選手 n=494	t 値
問37	柔道は他のスポーツと同じように楽しくやった方がよい	4.43(0.08)	3.55(0.05)	8.87**
問18	柔道はスポーツと考えるべきである	4.53(0.07)	3.48(0.05)	9.94**
合計の平均値		4.48(0.05)	3.52(0.04)	13.32**

nは人数 ()内は標準誤差 **p < 0.01

(2)-2. 欧州柔道選手と日本人学生柔道選手の因子スコアによる比較

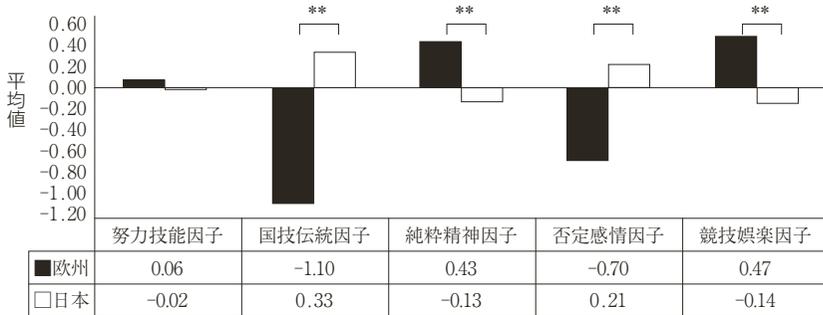


図1 欧州柔道選手と日本人学生柔道選手の因子スコアによる比較 **p < 0.01

【考察】

欧州柔道選手と日本人学生柔道選手において、最も共通している因子は、努力技能因子であった(表1、図1)。藤堂⁷⁾は「20歳前後の柔道修行者では『武道』として学んでいる人は少ないであろう」と述べている。つまり、本研究の対象年代は、競技を主として柔道を行っている年代であることから、努力技能因子が共通因子になったと考えられる。よって、欧州柔道選手、日本人学生柔道選手ともに、柔道は努力、鍛錬をして技術を磨くものという意識が強いと推測する。

また、欧州柔道選手と日本人学生柔道選手の特徴

を以下にまとめた。

前者は、純粹精神因子の5段階評定における「問14」、「問17」、「問49」、「問42」の比較および因子スコアの比較において(表3、図1)、また、競技娯楽因子の5段階評定の比較および因子スコア別の比較において(表5、図1)、後者より有意に高かった。これは、柔道を通じて、「勇気」、「平和」、「正義」などの精神性を養えることができ、なおかつ「競技的なもの」と考えていることが伺える。中世ヨーロッパにおいて、スポーツの精神性は、スポーツマンシップやアマチュアリズムとして表れている⁸⁾。つまり、欧州柔道選手の意識にある精神性は、スポーツ

マンシップやアマチュアリズムという言葉に置き換えることが可能であり、武道において養われる精神性と同義ではないかと考えられる。これらを考慮すると、欧州柔道選手は、柔道をスポーツ的に捉えていると推測する。

後者は、国技伝統因子の5段階評定の比較および因子スコア別の比較において（表2、図1）、また、否定感情因子の5段階評定の比較および因子スコアの比較において（表4、図1）、前者より有意に高かった。後者は、柔道の意識として、「恐ろしいもの」「こわい印象を与える」など、否定的な捉え方をしているが、「国技」であること、「古くから伝えられてきた大切なもの」など、伝統を大切にすると捉えていることが伺える。一般的に武道における稽古とは、「古の道を考える」という意味の説明もされている⁹⁾ことから、日本人学生柔道選手は、稽古を意識して柔道に取り組んでいることが伺える。すなわち、日本人学生柔道選手は、柔道を武道的に捉えていると推測する。

【結語】

本研究では、因子分析を用い、欧州柔道選手150名、日本人学生柔道選手494名、計644名の柔道に関する意識を抽出した。分析は、主因子法からNormal Varimaxによる直交回転を施した。その結果、解釈可能な5因子を抽出することができ、抽出された因子を以下のように命名した。

- 第1因子：努力技能因子
- 第2因子：国技伝統因子
- 第3因子：純粹精神因子
- 第4因子：否定感情因子
- 第5因子：競技娯楽因子

欧州柔道選手と日本人学生柔道選手の意識は、努力技能因子に共通性を持っていることが示唆された。両者は、努力し、技術を身につけ、試練を乗り越えるものという意識の下、柔道に取り組んでいることが伺われる。

欧州柔道選手の意識は、純粹精神因子、競技娯楽因子において、日本人学生柔道選手より有意に高かった。また、日本人学生柔道選手の意識は、国技伝統因子、否定感情因子において、欧州柔道選手より有意に高かった。つまり、欧州柔道選手は、柔道

をスポーツ的に捉えていることが示唆され、日本人学生柔道選手は、柔道を武道的に捉えていることが示唆された。

【引用文献】

- 1) 尾形敬史他：競技柔道の国際化。不昧堂出版，第1章，p.9，1998.
- 2) 吉田郁子：世界にかけた七色の帯 川石酒造之助伝。駿河台出版社，2004.
- 3) M・ウェーバー著：宗教社会学論選。みすず書房，p.5，1972.
- 4) E・W・サイード著：オリエンタリズム。平凡社，p.8，1987.
- 5) 永木耕介：嘉納柔道思想の継承と変容。風間書房，p.177，2008.
- 6) 中村敏雄：中村敏雄著作集。菊 幸一編，創文企画，p.285-286，2008.
- 7) 藤堂良明：柔道の歴史と文化。不昧堂，p.253，2007.
- 8) 賀川昌明：スポーツにみられる精神性の美。体育の科学Vol.54，No.8，p.633，2004.
- 9) 中村敏雄：スポーツの風土。大修館書店，p.165，1981.

世界柔道選手権大会における外国人選手の競技傾向 —1995年と2005年の比較—

石川美久¹⁾、横山喬之²⁾、竹澤稔裕³⁾、鮫島康太⁴⁾、佐藤伸一郎⁵⁾、篠原信一⁶⁾

1. 緒言

柔道競技では、世界柔道選手権大会（以下、「世界選手権」と略す）やオリンピックが最高の国際試合としてあげられる。これまでは、アジア、ヨーロッパ諸国が主要なメダル獲得国とされていた。しかし、1990年代後半から、共産圏の解体に伴い西ヨーロッパの弱体化とグルジアなどの東ヨーロッパの台頭が指摘されている⁶⁾⁸⁾。また、2001年の世界選手権では、北朝鮮、イラン、チュニジアが金メダルを獲得するなど新興勢力も出現し国際柔道の勢力図が変化してきた⁴⁾。

このような状況で、それらの外国人選手の技術的特徴を分析し、その特徴を明らかにすることは、新しい柔道の傾向を知ることに繋がる。

今日、国際大会における外国人選手の多様な組み方が指摘されており、組み方と施技との関連は、コーチングの重要なテーマといえる。しかし、これまでに世界選手権において組み方に関して行われた研究はみられない。

そこで本研究は、世界選手権における外国人選手の組み方と施技について、長期的な視点から技術的特徴の変化を明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

本研究で対象とした試合は、1995年幕張世界柔道選手権大会（以下、「幕張大会」と略す）と2005年カイロ世界柔道選手権大会（以下、「カイロ大会」と略す）の2大会である。

試合映像は、全日本柔道連盟強化委員会科学研究部が会場で撮影した8mmビデオテープ・DVDを用いた。さらに、正確さを期すため、大会の全試合結果が記録されたIJF公式記録を参照した。

本研究の分析項目は、技種類、総施技数、施技直前の組み方である。技種類は、講道館の投技である手技、腰技、足技、真捨身技、横捨身技の5種類についての施技数を検討した。総施技数は、試合者が施

技した全ての技を集計した。2大会の施技数は、幕張大会6608回、カイロ大会5819回の計12427回である。

施技直前の組み方は、施技直前に両手で柔道衣を握っている場合（以下、「両手組み」と略す）と、施技直前に片手で柔道衣を握っている場合（以下、「片手組み」と略す）と、施技直前に両手とも柔道衣を握っていない場合（以下、「握っていない」と略す）の3種類に大別し検討した。

施技の映像は、試合者全ての動作が撮影されているものを分析対象とした。分析施技については、投げる意思を持って掛けたと思われる施技全てとし、偽装的な攻撃として、「指導」の罰則を宣告されたときの施技は除いた。また、明らかに公式記録の技名称が異なる場合は、筆者が訂正した。

統計処理においては、技種類、総施技数、施技直前の組み方の分析項目について、クロス表を用いて、 χ^2 検定を行った。さらに、5%水準の有意差が認められた場合、期待値と実際の頻度の差を検討する残差分析を行った。

3. 結果及び考察

3.1. 技種類

全ての施技を講道館の投技である手技、腰技、足技、真捨身技、横捨身技の5種類にわけて検討した。

男子の2大会における技種類の比較を表1に示した。カイロ大会で増加がみられたのは、手技、真捨身技である。カイロ大会で減少がみられたのは、腰技、足技である。

中村らは、手技、腰技が大会ごとに徐々に増加していると報告している⁷⁾。本研究では、手技のみが増加し、腰技は、減少がみられた。手技においては、99年以降も増加傾向にあるといえる。これは後述するが、朽木倒、肩車、掬投等の手で直接脚を取る技の影響が増加要因と考えられる。腰技においては、幕張大会から増加傾向であったが、99年以降からカイロ大会の間で減少傾向になったと考えられ

1) 筑波大学 2) Pedro's Judo Center 3) 関東学園大学 4) 筑波大学大学院人間総合科学研究科
5) 拓殖大学 6) 天理大学

る。真捨身技においては、巴投、隅返等の影響が増加要因として考えられる。

足技においては、幕張大会で全体の40%を上回っていたが、カイロ大会では30%に満たない。また、手技を見てみると、幕張大会では30%程度であったが、カイロ大会では40%を越えている。足技の減少は、手技の増加が影響していると考えられる。

女子の2大会における技種類の比較を表2に示した。カイロ大会で増加したのは、腰技、真捨身技、横捨身技である。カイロ大会で減少がみられたのは、足技である。石川らの研究では、全施技内容を階級別に検討しており、それぞれに差が見られたと報告している³⁾。本研究では、外国人選手全体の傾向として集計を行ったため、差が見られなかったと推察される。

男女の共通点は、真捨身技の増加、足技の減少である。外国人選手は、返し技のリスクを軽減するため体を捨てながら真捨身技を多用していると思われる。また、相手の脚を直接取る技の増加、足技を返し技に変化、後述する組み合わせないことが減少した要因と推察される。さらに、審判員に対して攻撃と判断されるよう巧みに施技していることも増加要因として考えられる。

表1 2大会における技種類の比較 (男子)

技種類	幕張大会		カイロ大会	
	施技数(回)	割合(%)	施技数(回)	割合(%)
手技	1,185	-	32	43.8
腰技	365	+	9.9	6.4
足技	1,627	+	43.9	28.8
真捨身技	253	-	6.8	14
横捨身技	273	-	7.4	7
合計	3,703	100	3,571	100

+ : 5%水準で有意に大、- : 5%水準で有意に小

表2 2大会における技種類の比較 (女子)

技種類	幕張大会		カイロ大会	
	施技数(回)	割合(%)	施技数(回)	割合(%)
手技	928		760	33.8
腰技	309	-	10.6	12.6
足技	1,386	+	47.7	38.8
真捨身技	83	-	2.9	4.8
横捨身技	199	-	6.9	10
合計	2,905	100	2,248	100

+ : 5%水準で有意に大、- : 5%水準で有意に小

3.2. 総施技数

講道館の投技は、67本である。これらの技をすべて集計し、外国人選手の施技の検討を行った。

2大会における総施技数の上位20位までの比較を表3・4に示した。2大会で男女ともに最も多く施技していたのは、内股であった。しかし、内股は男女共にカイロ大会で減少している。この要因として、掬投の増加が考えられる。内股は片足で体を支え、相手の股に脚をいれる。よって、掬う、股の中で回す等の返し技のリスクが高いことから減少したと考えられる。また、柔道の一般的代表の技の一つである背負投においても、男女共にカイロ大会で減少がみられた。これは、男子において組み合わせないことが背景にある。一般的に背負投は、袖や襟を握った状態で施技する技であるが、本研究では組み合わせない傾向にあるため減少したと考えられる。女子においては、組み方に一定の傾向がみられなかったが、今後検討していく必要がある。

菅波らは、肩車と朽木倒は類似していると述べている⁹⁾。中村らは、片手組みから相手の懐に潜り込み、袖釣込腰や肩車、朽木倒、踵返に変化するなど、同じ入り方から状況に応じて変化すると述べている⁷⁾。本研究結果からは、肩車と朽木倒に増加がみられた。また、映像からもこれらの技が連絡して施技されていることも確認できた。外国人選手は、「崩し」「作り」をせずに懐に潜り込み、相手が崩れた方向に対して担ぎ上げる肩車、前方に倒す朽木倒等に変化していることが窺える。三戸は、フェイントについて「相手に気づかれないことや防御反応を行いにくくするほうが有利である」と述べている¹¹⁾。外国人選手は、最初に潜り込むと同時の施技によって、「崩し」やフェイントを生じさせ、次の技が相手に察知されないように施技していると推察される。菅波、中村らが述べる肩車や朽木倒などの同系統の技が生まれた要因として、旧ソ連の民族格技が影響していると思われる。

他に男子において真捨身技である巴投、隅返が増加した。これらの要因としては、上述した返し技のリスクを避けることや審判員に積極的な攻撃姿勢をみせることが考えられる。

施技した上位5位を見てみると、男子の幕張大会においては、内股、背負投、朽木倒、大内刈、小内刈の順で施技している。カイロ大会では、内股、朽木倒、肩車、隅返、一本背負投である。カイロ大会では、組み合わせない状態からでも、比較的施技が可能な技の多用がみられる。女子においては、一定の傾向はみら

れなかった。

その他、東欧圏の国々の選手が裏投などの返し技が多く見られたと報告がある¹²⁾。しかし、本研究において裏投に差はみられなかった。

表3 2大会における総施技数の比較 (男子)

施技名	幕張大会		カイロ大会			
	施技数(回)	割合(%)	施技数(回)	割合(%)		
背負投	287	+	7.8	216	-	6
一本背負投	195	-	5.3	239	+	6.7
体落	107		2.9	94		2.6
掬投	133	-	3.6	193	+	5.4
双手刈	72	-	1.9	103	+	2.9
朽木倒	274	-	7.4	394	+	11
肩車	84	-	2.3	284	+	8
払腰	108	+	2.9	66	-	1.8
袖釣込腰	158	+	4.3	125	-	3.5
支釣込足	96	+	2.6	26	-	0.7
小内刈	248	+	6.7	127	-	3.6
大内刈	243	+	6.7	159	-	4.5
小外刈	123		3.3	93		2.6
小外掛	73	+	2	23	-	0.6
大外刈	218	+	5.9	130	-	3.6
内股	543	+	14.7	429	-	12
巴投	117	-	3.2	230	+	6.4
隅返	95	-	2.6	243	+	6.8
谷落	65	+	1.8	32	-	0.9
払巻込	76		2.1	85		2.4
合計	3,315		90	3,291		92

+ : 5%水準で有意に大、- : 5%水準で有意に小

表4 2大会における総施技数の比較 (女子)

施技名	幕張大会		カイロ大会			
	施技数(回)	割合(%)	施技数(回)	割合(%)		
背負投	175	+	6	60	-	2.7
一本背負投	304		10.5	249		11.1
体落	66	+	2.3	30	-	1.3
掬投	81	-	2.8	89	+	4
双手刈	93		3.2	55		2.4
朽木倒	162	-	5.6	162	+	7.2
払腰	85	-	2.9	136	+	6
釣込腰	35		1.2	25		1.1
袖釣込腰	134	+	4.6	62	-	2.8
支釣込足	49	+	1.7	17	-	0.8
小内刈	170	+	5.9	100	-	4.4
大内刈	283	+	9.7	153	-	6.8
小外刈	146	+	5	83	-	3.7
小外掛	41		1.4	42		1.9
大外刈	179		6.2	111		4.9
内股	474	+	16.3	299	-	13.3
巴投	63		2.2	59		2.6
谷落	47		1.6	23		1
外巻込	33	+	1.1	7	-	0.3
払巻込	69	-	2.4	148	+	6.6
合計	2,689		92.6	1,910		84.9

+ : 5%水準で有意に大、- : 5%水準で有意に小

3.3. 施技直前の組み方

柔道の組み方は、「標準的」組み方として審判規定に定められている。日本では、従来相手の横襟（鎖骨周辺）と外中袖（肘下）を握ることが効果的であり、基本の握り方とされている。

しかし、試合では、組み方が勝敗に影響することから激しい組み手争いが生じ、「標準的」組み方でない場合が見られる。菅波らは、ヨーロッパ選手が日本人選手に比べて、激しい攻撃を展開していると述べている¹⁰⁾。また、廣瀬らは、激しい組み手争いの攻防が試合時間の多くを費やしていると報告している²⁾。つまり、組み方は試合展開を左右するといえる。そこで、組み方について「両手組み」「片手組み」「握っていない」の3種類に大別し検討した。

2大会における施技直前の組み方の比較を表5・6に示した。男子においては、「両手組み」が減少し、「片手組み」「握っていない」が増加し、全てにおいて変化がみられた。女子においては、変化がみられなかった。

試合を観察する日本人コーチは、外国人選手は「標準的」組み方をせず、変則的な組み方をしていると指摘している。本研究から、これは男子においても映像から変則的な組み方をしていることが確認され、コーチの指摘は、これら一部の選手を指していると考えられる。本研究から、男子外国人選手は、両手で組み合わせるスタイルではなく、「片手組み」「握っていない」の状態から施技しているといえる。さらに、本研究において増加が確認された肩車、朽木倒、掬投、双手刈等は「片手組み」「握っていない」の状態に起因していると考えられる。よって、この組み合わせないスタイルがさらに増加するならば将来的に肩車、朽木倒、掬投、双手刈等が多用されていくことが考えられる。このスタイルの増加に伴い、片足で立つ内股、大外刈等は、返し技のリスクが比較的事あることから減少したと考えられる。

広崎らは、頻度の少なかった組み手でポイントを取得していると述べている¹⁾。また、一流選手の試合において、オーソドックスな組み方からの施技では、相手に捌かれてしまい、ポイントを奪うことができないと述べている。さらに、意外な組み手から施技する方が相手の意表を突きポイントを奪うことができると報

告している。廣瀬らは、男子の特徴として、相手が予想しがたい垂流技で多く攻撃展開し、その技は効果的であると述べている²⁾。

このことから、本研究の「片手組み」「握っていない」状態は、上記の相手が予想しがたい組み方に分類できる。したがって、外国人選手は、「片手組み」「握っていない」状態から、相手の虚を突くような施技をするため組み合わない状態を作っているといえる。その代表的な施技として挙げられるのが、本研究で増加が見られた肩車や朽木倒であろう。

本研究では、女子の組み方に差が認められなかった。廣瀬らは、女子選手群に関しては釣りで奥襟、背中を握り両手で十分に引き付けてからの施技が特徴的であったと報告している²⁾。石川らは、女子において全階級で袖と肩、襟と上腕の組み方が増加し、階級別にみても上腕と肩、袖と帯、上腕と握っていない組み方が増加したと報告している³⁾。

本研究で変化がみられなかった要因として、組み方を3種類に大別し、外国人選手の全体の傾向をみるため全階級を一つにまとめて分析したことが考えられる。

中村は、1998年以降に段階的に整備された組み方に対する罰則強化により相手に組ませない行為を禁止し、お互い両手で組み合うことが試合での絶対条件となったと述べている⁵⁾。しかし、本研究では、カイロ大会の男子において、「片手組み」「握っていない」の組み方が増加した。つまり、IJFは、組み合うようにルール改正を行ったが、外国人選手は組み合うことを目的としたルール改正と異なる方向に進んでいるといえる。

表5 2大会における施技直前の組み方の比較(男子)

施技直前の組み方	幕張大会		カイロ大会			
	施技数(回)	割合(%)	施技数(回)	割合(%)		
両手組み	2,608	+	70.4	2,221	-	62.2
片手組み	976	-	26.4	1,145	+	32.1
握っていない	119	-	3.2	205	+	5.7
合計	3,703		100	3,571		100

+ : 5%水準で有意に大、- : 5%水準で有意に小

表6 2大会における施技直前の組み方の比較(女子)

施技直前の組み方	幕張大会		カイロ大会			
	施技数(回)	割合(%)	施技数(回)	割合(%)		
両手組み	1,913		65.8	1,460		64.9
片手組み	824		28.4	661		29.4
握っていない	168		5.8	127		5.7
合計	2,905		100	2,248		100

+ : 5%水準で有意に大、- : 5%水準で有意に小

4. 結論

本研究は、1995年幕張大会と2005年のカイロ大会における外国人選手全体としての施技と組み方の傾向を長期的な視点から検討し、以下のことが明らかとなった。

1. 男女共に、真捨身技が増加し、足技が減少した。
2. 男子において肩車、朽木倒、掬投が増加し、体を捨てる、担ぎ上げるといった施技が特徴的といえる。
3. 男子において、施技する直前の組み方として、「両手組み」が減少し、「片手組み」「握っていない」状態からの施技が増加した。組み合うことを目的としたルール改正と異なる方向に進んでいるといえる。

引用文献

- 1) 広崎寿伸他(1992) 組み手と技の効果についての競技分析. 武道学研究, 24 (3) : 51.
- 2) 廣瀬伸良他(2001) 柔道競技の技効力と組み手に関する投技戦術行動についての競技分析的研究. 順天堂大学スポーツ健康科学研究, 5 : 57-59.
- 3) 石川美久他(2009) 世界柔道選手権大会における外国人選手の組み方と施技の特徴—1995年と2005年の比較—. 筑波大学体育科学系紀要, 32 : 101-111.
- 4) 射手矢 岬(2001) 世界柔道選手権大会. 柔道, 72 (9) : 23.
- 5) 中村 勇(2006) 競技傾向. 中村良三編. 女子柔道論, 創文企画 : 東京. pp.30-31.
- 6) 中村 勇他(2002) 1995年から1999年までの世界柔道選手権大会のポイント獲得傾向—性別と階級別の比較—. 講道館柔道科学研究会紀要, 9 : 149.
- 7) 中村 勇他(2002) 1995~1999年世界選手権大会の競技分析 : 勝利ポイントと勝利ポイント獲得技による比較. 武道学研究, 35 (1) : 15-23.
- 8) 中村 勇他(2005) 2003年世界柔道選手権大会の競技傾向の分析—男女の比較—. 講道館柔道科学研究会紀要, 10 : 83.
- 9) 菅波盛雄他(2001) 日本人男子柔道選手の欧州大会における敗退要因について. 武道学研究, 34 (2) : 18.

- 10) 菅波盛雄他 (1994) 65kg級における日本とヨーロッパの柔道競技内容の分析と比較. 順天堂大学保健体育紀要, 36 : 16-32.
- 11) 三戸範之(2007)柔道投げ技におけるフェイントの方法. 秋田大学教育文化学部研究紀要教育科学部門, 62 : 85-90.
- 12) 全日本柔道連盟強化委員会科学研究部 (1988) 柔道の競技分析. 柔道競技力向上に関する研究, p.115.

2008 International Judo Symposium on Sports Medicine and Science

Program International Judo Symposium — Medical and Scientific Aspect —

Time : December 11th, Thursday, 2008 , 14:00 to 16:30.

Place : At Kodokan (講道館、本館)

3rd Floor. Conference Room No.3,

(5 minutes walk from Tokyo Dome Hotel)

Address : 1-16-30, Kasuga, Bunkyo-ku, Tokyo, Zip 112-0003

TEL 03-3818-4199

FAX 03-3812-3995

Medical Scientific Committee of All Japan Judo Federation

Chairman : Taisuke Tomatsu M.D.

Invitation Lecture 1 14:05 ~ 14:50

Chairman : T.Tomatsu

Recent trend of *Trichophyton tonsurans* Infection in Japanese Judo Players

Authors

Nobuyoshi Hirose, Morio Suganami, : Juntendo Univ. School of Health and Sports

Absract

T. tonsurans infection has been known as a cause of ring-worm of the head in Latin America. However, T. tonsurans infection became epidemic in United States from 1960 and the outbreaks of this disease among martial art groups such as judo players were frequently reported in US, Europe and Korea. Since 2001, the outbreaks of T. tonsurans infection were frequently observed among Judo club members and recognized it as the social problem in Japan.

We, research group of T. tonsurans infection, have started to study it's infection rates of Judo clubs by hair brush culture method since 2002. The results of this study showed it's infection nationalwidespread among junior high school, high school and university judo clubs and it's positive rate of infection by this method went up to between 10% and 40%. Also we have been studied the present status of this disease, accurate examination, treatment and effective prevention.

In this lecture, I would like to introduce the many researches and reports of the T. tonsurans infection and recent trend of this disease in Japan.

**Coffee Break
&
Poster Session
14:50 ~ 15:40**

Chairman T.Tomatsu

1 : An Investigation of *T. tonsurans* Infection in Judo athletes registered at the University Judo Federation of Tokyo

Authors

Nobuyoshi Hirose, Morio Suganami, : Juntendo Univ. School of Health and Sports
Yumi Shiraki, Masataro Hiruma : Department Dermatology, Juntendo Univ.
Taisuka Tomatsu, Tadashi Murota, Kunio Ebine : All Japan Judo Federation

Abstract

In Japan, *T. tonsurans* infection is still very likely to spread widely. In this study, we investigated the situation of morbidity in the whole members of the organization including ones who have not competed in a tournament.

[Method] The brush culture test and a questionnaire survey were conducted in 902 individuals (754 males and 148 females) belonging to the Judo clubs in 21 universities (males in 16 universities, females in 5 universities) who have been registered as athletes at the University Judo Federation of Tokyo and competed in a national tournament in the year 2008.

[Results] 11.3% (102 cases) of the whole population are brush culture-positive cases, and males showed a particularly high morbidity rate of 12.6% (95 cases). 88.2% (90 cases) of brush culture-positive cases had a past history of the development of ringworm lesion, and 86.3% (88 cases) answered that "they are asymptomatic" at the time of the test.

[Discussion] This survey found that the current situation of *T. tonsurans* infection in college judo athletes is that asymptomatic carriers have been increased and it has become more difficult for athletes themselves to confirm the infection, as compared to the situation several years ago. It will be necessary to conduct the brush culture test periodically for the overall organization and to consider how treatment should be done after the test.

2 : Examination of Experience of Judo Therapists Gained from Treatment Given to Mongolian Judo National Team Selection Members

Authors

Nobuyoshi Kume^{1,2)}, Yuji Tazawa¹⁾, Minoru Kameyama¹⁾, Noboru Hashimoto^{1,2)}, Tetsuo Kudo¹⁾, Tadashi Hagiwara¹⁾

1) Japan Judo Therapist Association

2) Tokyo Ariake University of Medical and Health Sciences

Abstract

To begin with, judo therapy is a kind of Japanese traditional medical treatment which consists

of techniques based on the practice of Jujutsu which have been passed down to help those who have received external injuries recover.

Exchange between judo therapists and Mongolia began about 5 years ago, and from 3 years ago this exchange continued with the Grant Assistance for Japanese NGO; Non-Governmental Organizations Projects which was received for the Japanese Traditional Medical Treatment (Judo-Therapy Techniques) Propagation Project. Within this project we have conducted surveys of the Mongolian national sport Mongolian wrestling (*Bökh/Bayirldax*) and provided treatment for injuries to wrestlers. Because of this we received a request from the Mongolian Judo Federation to provide advice and treatment for its national team selection members.

Many Mongolian judo athletes complain of throbbing pain in their knee joints. The results of various clinical diagnoses show that complex damage of the anterior cruciate ligaments of the knee and the medial collateral ligament as well as damage of the medial meniscus are common.

Therefore we considered it why there were much these injuries.

3 : The myodynamic trait of shoulder girdle and trunk in high level Judo players

Authors

Toshihiko Hashimoto¹⁾, Naoyuki Okada¹⁾, Koji Isozaki²⁾, Noboru Sakanoue²⁾, Munenori Kato²⁾, Masataka Hoshida²⁾, Tomohiro Suzuki²⁾, Kotomi Shiota²⁾, Kyohei Kawada²⁾, Toshihiko Yamada²⁾

1) Medical Education Center, School of Health Science, Ryotokuji University

2) School of Health Science, Ryotokuji University

Abstract

We evaluated the myodynamic trait of shoulder girdle and trunk in 19 high level Judo players (15 males and 4 females) of the class of 60-100kg. There was no correlation in the isokinetic myodynamia of each body site and center of gravity deflection. The peak torque / BW of the internal rotation of the shoulder was strong as compared with the peak torque / BW of the external rotation of the shoulder, and there was a significant difference ($P<0.001$). The peak torque / BW of the extension of trunk was strong as compared with the peak torque / BW of the flexion of trunk, and there was a significant difference ($P<0.001$). The peak torque of internal rotation / peak torque of external rotation of the shoulder and the peak torque of extension / peak torque flexion the trunk were high as compared with the member of the public, and it was reflecting the game trait. The muscle strengthening and the complex musculus balance are important for an impairment prophylaxis of a shoulder joint or an elbow joint, and it is important to catch an individual body trait with a game trait.

4 : The Relationship between Stabilometry and Warming-up in Female Judo Athletes

Authors

Hajime Nakahara¹⁾, Michito Sakamoto¹⁾, Yuji Ozawa²⁾

1) Fukuoka University Department of Sports and Health Science

2) Kumamoto University

Abstract

The purpose of this study was to investigate, using a stabilometer (Gravicorder-G3000), the relationship between warming-up and stabilometry in female judo athletes.

Results were as follows:

- 1) Female judo athletes showed a higher ability of stabilometry than the average healthy subjects.
- 2) Concerning before warming-up, female judo athletes showed a significantly higher value LNG, LNG/TIM, LNG/ARES with eyes open than each value with eyes closed. But female judo athletes did not show a significantly higher value E.AREA.
- 3) Concerning after warming-up, female judo athletes showed a significantly higher value LNG, LNG/TIM, E.AREA with eyes open than each value with eyes closed. But female judo athletes did not show a significantly higher value LNG.AREA.
- 4) Concerning after warming-up and before warming-up, female judo athletes showed a significantly higher value LNG/E.AREA with eyes closed.

For the reasons stated above, when female judo athletes who showed higher ability of stabilometry than the average healthy subjects do some warm up, the figures of the included area (E.AREA) increased accordingly. This occurrence was due to the (Envelope) X-Y recorded figure of eyes opened in the line surrounding the circumference center point of the ground reaction force. However, in regards to the (LNG/E.AREA), the number total trajectory length divided by the number of the periphery area, became smaller. Presumably, this result was influenced directly by the number of years of Judo practice.

5 : Identifying judo movements that cause apprehension and pain after the recovery from knee injuries

Authors

Sentaro Koshida¹⁾, Tatsuya Deguchi²⁾, Yukio Urabe³⁾, and Toshihiko Hashimoto¹⁾

1) Ryotokuji University, Faculty of Health Sciences

2) Hiroshima University, Graduate School of Education

3) Hiroshima University, Graduate School of Health Sciences

Abstract

Background: Judokas often continue feeling apprehension and pain during certain judo movements after they return to their previous activity level from knee injuries, which inversely affect the judo performance and increase the risk of re-injury. Objective: To demonstrate the situations that cause apprehension and/or pain in the judokas who recovered from knee injuries and attended the regular practice routine Method: We used questionnaires to gather the information from 65 judo athletes who suffered from mild to severe knee injuries. The mean (\pm SD) age, body weight, and years of judo experience were $19.3\pm 1.6y$, $169.1\pm 7.1cm$, $79.5\pm 19.5kg$, $9.8\pm 3.6y$, respectively. Results: When being swept with *kosotogari* or *ashi-harai* and being moved their body weight toward the injured side, the number of

participants who felt apprehension was significantly greater than the number of those who did not feel apprehension. Gender, body weight, injured site in knee, experience of surgical intervention, and duration from the injury occurrences were not significantly associated with the number of participants who had apprehension with the movements. Discussion: The increased knee valgus and compression forces on the injured side by the judo movements might be associated with the feeling of apprehension that occurs in judokas.

6 : Analysis of victory or defeat cause of Japanese judo team in Beijing Olympic —Based on the psycho-diagnostic standard of the UK method

Authors

Masayasu Funakoshi¹⁾, Naoya Uchimura²⁾,
Mitsutoshi Nanjo³⁾ and Hironori Hayashi⁴⁾

- 1) Osaka Society for Study of Psycho-Diagnostic Method
- 2) Osaka Sangyo University,
- 3) Sendai University and
- 4) Meiji University of Integrative Medicine, JAPAN

Abstract

In the approaches of sports aptitude that uses the UK method, it is clarified that ① the appearance rate of specific individuality is high, and ② a mental health degree is high as the game level goes up. Additionally, according to the UK data of 4000 players or more that All Japan Judo Federation collected since the Munich Olympics, it is confirmed to the international game player who left the good record that ③ the mental energy level is high, and that ④ the player has the desire, power, and stickiness. In this study, the relation to the result of the Japanese judo team in Beijing Olympics and the above-mentioned four indices were examined.

Objects were the man and woman each of seven representatives, and 14 players in total. Gold medals were four, other medals were three, and no medals were seven people in the breakdown of the game result. The inspection period was 21 days of July from the 30th of June in 2008 years. Results were as follows.

- 1) The tendency on which a specific character pattern concentrates was confirmed as well as past data, and another was 3 against 11 players with the artisan spirit and the masterly sensitivity. ($p=0.06$ CR=1.87)
- 2) Representative's mental energy level is similarly high, and 11 players had reached the highest efficiency of amount in 14 people. ($p=0.06$ CR=1.87)
- 3) Player's level of the mental health degree was high, and the ratio of the high, middle and low health was 8:5:1. ($\chi^2=5.285 > 4.605$ $p=0.10$)
- 4) Three champions were players who showed a rising curve that symbolized the desire, power, and stickiness. However, the champion was only one in ten players who showed a flat or down curve by the work of latter term. ($\chi^2=3.159 > 2.705$ $p=0.10$)

It is a cause of the defeat that rising curve was few when players of large majority show a

necessary specific individuality, high mental health, and high mental energy level. Especially, being not able to make the state of the mind and body sticky to the last minute decisively might be future tasks.

7 : A bi-cultural study of how Judo is done by children aged 6-12 years in Japan and France

T. Colin¹⁾, M. Iteya²⁾, B. Doring³⁾, French Federation of Judo

1) Visiting scholar at Tokyo Gakugei University

2) Tokyo Gakugei University

3) Université de Paris 5, La Sorbonne

Abstract

The speeches of Professor Jigoro Kano are in Japan and in France a common reference for children's education. Judo has to allow: "*to develop one's self and contribute to society*". For both countries, the aims of the teaching are at first educational. The security of the children, the respect for children's differences, and the adaptation of the teaching method according to the characteristics of the children, are research subjects in both countries. For that reason, our comparative study can be an approach of mutual aid and an exchange of knowledge between two countries in a perspective of progress.

This study progresses according to 3 stages:

- 2000-2007 : A study of the French Federation of Judo.

- 2008-2009 : A study in Japan

- 2009-2010 : A study complement in France.

We present here:

-Our method of investigation in Japan and in France for the next two years.

-The recent works of the research service of the French Federation of judo.

The fundamentals of : "*An educational approach for the children judo initiation from 6 to 8 years old*", (publication 2007).

8 : Injuries that Happen during Judo Activity in School

M. Iteya¹⁾, J. Shimada²⁾, T. Colin³⁾, and K. Mori⁴⁾

1) Tokyo Gakugei University

2) Shousei Junior high school, Toyama

3) Visiting Scholar at Tokyo Gakugei University

4) Undergraduate Student at Tokyo Gakugei University

Contact: iteya@u-gakugei.ac.jp

Abstract

Budo (Judo, Kendo, and Sumo wrestling, etc.) will be needed in all junior high school on April

2012 along with a revision of the course of study. Generally, Judo is thought to be a dangerous sport accompanied by a lot of injuries. Therefore, the school's teachers worry about injuries in judo activity. The purpose of this study was to clarify cases of the injuries generated in Judo activity and to propose the methods of preventing the injuries.

The questionnaire survey was done to 40 teachers of junior high and high school. Question contained 6 items; age, dan, experience of Judo, contents of warming up, cases with injury during Judo activities, and guidance for prevention.

There were a lot of parts in the order of the collarbone, the foot (toe was included), and the hand (finger was included) etc. There were a lot of injuries related to fractures, sprains, dislocations, and the piercing finger etc. These results were similar to findings of previous investigations which were conducted in social Judo clubs. How can injuries be prevented during teaching judo? In this study, we provided some ideas for safe instruction in order to prevent these injuries.

9 : Meniscal injuries of Judo Athletes

Seiji Miyazaki¹⁾, Yutaka Nakamura²⁾, Nobuyuki Sato¹⁾, Toshiaki Hashimoto¹⁾, Hideharu Shirase¹⁾, Yasuhiro Yamashita¹⁾, Hidetoshi Nakanishi¹⁾, Kenichiro Agemizu¹⁾

1) School of Physical Education Tokai University

2) Institute of Sports Medical Science Tokai University

Abstract

The influence of Anterior Cruciate Ligament (ACL) for meniscal injury in 486 judo athletes was examined. Meniscal injury in judo athletes is 5.2%.

ACL insufficiency is made medial meniscal injury easy to cause, however, significant differences between medial and lateral meniscal injury is not seen because ACL insufficiency was not presented. The probability of meniscal injury is high because there is ACL insufficiency (13.8%) in female. On the other hand, in male the presence of ACL insufficiency doesn't influence meniscal injury.

10 : Outcome of Anti-Doping Movement in the All Japan Judo Federation between 1993 and 2008

Authors

K. Ebine^{1,2)}, K. Tsuyuki^{1,2)}, S. Watanabe^{1,2)}, T. Sakamoto^{1,2)}, A. Miyazaki²⁾, Y. Ohe²⁾, Y. Ohzeki²⁾, Y. Onuma²⁾, E. Tokumoto²⁾, H. Kato²⁾, N. Sato²⁾, S. Yamazaki²⁾, Y. Shimbara²⁾, N. Takehara²⁾, M. Takeshita²⁾, H. Nakahara²⁾, D. Kuroiwa²⁾ and Y. Anai²⁾

1) Odawara Cardiovascular Hospital

2) Medical Scientific Committee, All Japan Judo Federation

Abstract

All Japan Judo Federation (AJJF) decided at a director's meeting on December 14, 1993, to test whether athletes taking part in competitions used banned substances or improper procedures prohibited by World Anti-Doping Agency (WADA) rules, organized an anti-doping committee and sample taking teams, and prepared a doping manual to train staff, athletes and coaches. Based on this, the AJJF began doping control (DC) at the All Japan Judo Championship on April 29, 1994.

For the individual world championships and international tournaments, testing is performed on 3 subjects from each weight category: the first one is championship winner, the second is one of the three remaining medal-winners and the third is one of the 5th · 7th placed subjects chosen by lot.

DC tests have been conducted in 115 competitions, including international and major domestic ones in Tokyo, Makuhari, Yokohama, Nagoya, Osaka, Fukuoka, Ageo and Chiba. A total of 1645 samples have been obtained. The anti-doping committee prepared penalties to be imposed on subjects testing positive, 5 positives have occurred to date.

The Japan Anti-Doping Agency (JADA) was established in 2001. And now it has been positioned as substructure of ministry of education, culture, sports, science and technology. This after, JADA will be committee to activity conducting educational campaigns on anti-doping in Japan.

11: Accuracy of Sample Collection for Anti-Doping Control in Judo Competition

Authors

K. Tsuyuki^{1,2)}, K. Ebine^{1,2)}, S. Watanabe^{1,2)}, T. Sakamoto^{1,2)}, Y. Ohe²⁾, Y. Ohzeki²⁾,
Y. Onuma²⁾, E. Tokumoto²⁾, H. Kato²⁾, N. Sato²⁾, S. Takemura²⁾, K. Kamohara²⁾, Y. Konno²⁾

1) Odawara Cardiovascular Hospital

2) Medical Scientific Committee, All Japan Judo Federation, Japan

Abstract

【Objectives】 This study's aim to asses the accuracy of specimen method in urine sample collection for anti-doping control.

【Background】 Subjectivity is included in evaluation of pH and gravity using specimen method.

【Methods】 Doping control tests have been conducted in 8 competitions, including major domestic Judo tournaments. One hundred nineteen urine samples have been obtained (Apr.7, 2007- Sep.14, 2008). All athletes enrolled gave informed consent.

These following 3 values of pH and gravity were compared.

1. Field test
 - Specimen (SP)
 - Specimen using handy analyzer (SP-HA)
2. Laboratory test
 - WADA-accredited laboratory (LAB)

【Results】

pH test : A moderate relationships ($r = 0.65$, $p < 0.001$) were observed between 2 field tests (SP and SP-HA, respectively) and LAB. Coefficient of regression in SP (0.90x) is the same as SP-HA (0.90x) for LAB. Of the 119 difference values, 95% (113/119) in SP and SP-HA were within 1.96 SD of mean.

Gravity test : A coefficient of correlation with LAB is higher in SP-HA (0.94) than SP (0.68). A regression line with LAB is steeper in SP-HA (0.51x) than SP (0.17x). Of the 119 difference values, 95% (113/119) in SP, 97% (115/119) in SP-HA were within 1.96 SD of mean.

【Conclusion】

Personal handy analyzer is useful for urine sample collection in anti-doping control.

12 : Title: Attitude survey to “Doping” in training camp for promising junior-high- school Judo players

Authors

S.Watanabe^{1,3}, K.Ebine^{2,3}, K.Tsuyuki^{2,3}, Y.Ohe³, Y.hzeki³,
Y.Onuma³, E.Tokumoto³, H.Kato³, N.Sato³, T.Sakamoto^{2,3}, S.Takemura³, Y.Konno³

Institute : 1) Kanagawa Institute of Technology, Kanagawa, Japan

2) Odawara Cardiovascular Hospital, Kanagawa, Japan

3) All Japan Judo Fedelation, Tokyo, Japan

Abstract

【Introduction】 We held the Judo junior block training camp every year. This camp is aimed at spreading, strengthening and the activation of the Judo for junior high school students, and it is a purpose of the training camp to find promising players. In addition, not only a reinforced practice but also an educational lecture such as “Anti doping” is carried out in this training camp. When lecturing in current years, we executed the attitude survey to “Doping”. The purpose of the present study is to analyze the result of the survey according to age, athletic career and the domicile.

【Method】 The number of junior high school Judo player made the object of this survey, 213 men (14.10 ± 0.75 years old) and 119 women (14.03 ± 0.79 years old). The question of the survey is “Do you know word “Doping”?”, “Do you know the harmful substance might be contained in the medicine and supplement?”, “To became a gold medalist in the Olympics, is “Doping” act done?”

【Result】 Player with lower age and/or less athletic career are considered to have less information on “Doping”. Players in Shikoku area are found to have less knowledge on “Doping and Supplements”, compared with those in other areas such as, Chubu, Chugoku, Kyushu and Okinawa. There was one player who had answered, “I think that I may do the doping act” to win a gold medal in the Olympics. On the other hand, 93.37% of the players have answered, “I never do the doping”.

【Conclusion】 The degree of knowledge about present questions are found to be significant

area to area difference. It is necessary to do reinforced educational guidance for players in order that all players will not commit "Doping" as much as possible in the future.

Invitation Lecture 2 15:40 ~16:25

Chairman : M. Iteya

Preliminary Title "Judo Performance"

Author

Dr. Mike Callan

Sports Development Manager, Director of Judo, Department of Sports Development and Recreation, University of Bath

日本柔道史年表 1956→1965

渡邊 昌史(天理大学)

年	全柔連の歴史・国内の柔道界	世界の柔道及び日本の成績
昭和31 (1956)	<p>1. 講道館護身術制定</p> <p>4.29 第1回世界柔道選手権大会日本代表決定大会(蔵前国技館) A組決勝は吉松義彦(九州)が醍醐敏郎(東京)を僅か2分余りで体落にて一蹴。B組決勝は夏井昇吉(東北)が松本安市(近畿)を20分の制限時間一杯の熱戦の末に判定で降し、吉松・夏井が代表に決定。全日本選手権はこの年中止。</p> <p>6.15 日本三協会 結成 全柔連・全日本剣道連盟・日本弓道連盟の助成ならびに連絡融和を図り、三道の奨励にあたるために日本三協会が結成された。</p> <p>7.8 第5回全日本学生柔道優勝大会(蔵前国技館)天理大が初優勝。②日本大、③中央大、同志社大。</p> <p>7.8 第6回全国実業団柔道大会(大阪市) 団体：有段者・①倉敷レイヨン、②旭化成。段外者・①三菱レイヨン、②日本鋼管。</p> <p>8.4 第5回全国高等学校柔道大会(山形市) 団体： -5 ①鹿児島商業(鹿児島)、②東海(愛知)、③玉名(熊本)、③八戸(青森)。</p> <p>8.14 第30回西日本高校柔道選手権大会(福岡スポーツセンター) ①久留米商業(福岡)、②玉名(熊本)、③嘉穂(福岡)、大濠(福岡)。</p> <p>8.28 講道館新築後援会 結成 講道館70周年記念事業期成会を発展的に解消し発足。</p> <p>9.30 第7回全日本東西対抗柔道大会(大阪府立体育会館) 東西各25選手(所属都道府県から必ず1名出場)による勝ち抜き試合。西軍、不戦2人で4連勝。</p> <p>10.6 全国警察柔道大会(東京体育館) 団体：大阪が2度目のV、②警視庁。選手権：①山舗公義(京都)、②石橋弥一郎(福岡)、③遠藤 栄(警視庁)</p> <p>10.13 第5回全国青年大会柔道競技(講道館) 団体：荒尾市。軽量級・中村 優(熊本)、中量級・田中宣明(鹿児島)、無差別・田島弘治(愛知)がそれぞれ優勝。</p> <p>10.21 第1回全日本招待選抜新人柔道大会(福岡スポーツセンター) 九州柔道協会主催・全柔連後援で開催。27歳以下の32名によって争われた。19歳の神永昭夫(明治大)が河野雅英(大阪)を降し優勝。小田雄三(京都)と古賀正躬(天理大)が3位。</p>	<p>1. フランス、柔道教師に国家試験を導入</p> <p>5.3 第1回世界柔道選手権大会(蔵前国技館) 21ヶ国31名の参加。夏井昇吉(秋田県警)、吉松義彦(鹿児島県警)が共に圧倒的な強さで勝ち進み、準決勝で吉松はヘーシンク(オランダ)を僅か45秒左内股でしとめ、夏井もクルティース(フランス)を組んで僅か5秒右体落に決めて決勝に進んだ。決勝は両者まったく譲らず遂に20分、副審の旗が分かれるなか、三船主審は夏井に軍配を上げた。夏井が初の「世界一」の栄誉に輝いた。②吉松義彦、③ヘーシンク、クルティース 日本人審判員：三船久蔵、小谷澄之、栗原民雄、高橋喜三郎、高橋秀山、会田彦一、子安正男、高木喜代市、緒形久人、宇土虎雄、胡井剛一、川上忠、神田久太郎、鈴木潔治、高垣信造、浜野正平、大島耐二、松崎太平、森下 勇、大塚美夫、菊池揚二、久永貞男。</p> <p>5.5 国際親善柔道大会(蔵前国技館) 世界選手権出場者及びその他各国の選手が出場し、紅白点取り試合を行った。</p> <p>5.7 IJF総会(東京) 第2回国際柔道連盟総会が東京産経会館で開かれ、新たに17ヶ国を加え30ヶ国に。会長任期(4年)につき改選を行い、欧州柔連会長の提案で、嘉納履正・会長の重任を満場一致で可決した。現行の規約は欧州柔連のものであり、新規約を制定し名実ともに真の国際組織となった。規約第1条(後段)「技術方法については、故嘉納治五郎師範が定め、かつ東京の講道館に於いて行われるもの以外のものは認めない」。</p> <p>5.7 アジア柔道連盟成立 国際柔道連盟総会にて豪州およびニュージーランドを含む太平洋地域柔連の設立を承認。会長は嘉納履正・全柔連会長が就任した。</p> <p>10.5 外務省派遣東南アジア柔道使節 川村禎三、渡辺政男が台湾、フィリピン、ベトナム、カンボジア、タイ、シンガポール、セイロン、香港で巡回指導を行った。</p>

年	全柔連の歴史・国内の柔道界	世界の柔道及び日本の成績
	<p>10.28 初の女子柔道紅白点取稽古 講道館にて文京区民大会として行われた。当時、女子の試合は禁止されており、講道館女子部長・高橋浜吉(文京区柔連会長)を説得して、ようやく実現した。“禁を犯す”だけになかなか慎重で、13歳から25歳までの20人の女子部員が紅白に分かれて、稽古時間は2分間、うち1分は普通の乱取りだが、時間を示すベルの合図で「自由稽古」すなわち試合形式に入る。副審3人が歩合(技の巧拙、試合態度)を採点する。下腹部に衝撃を与える内股等や横四方固も避けるように指導。講道館長が国体出張中で留守中の出来事であった。 「日刊スポーツ10月27日付」より</p> <p>10.29 第11回国民体育大会柔道競技(神戸市) 競技別総合・①広島。一般・①愛知、②大阪。高校・①福岡、②広島。</p> <p>11.10 第8回全日本学生東西対抗柔道試合(大阪府立体育会館) 東軍が不戦2人で雪辱。</p> <p>11.11 第8回全日本学生柔道選手権大会(大阪府立体育会館) ①米田圭佑(天理)、②渡辺喜三郎(中央)、③神永昭夫(明治)、金谷 満(日本)。</p> <p>11.23 第4回全日本産業柔道大会(講道館) 1部、2部ともに繊維部門が優勝。</p>	
<p>昭和32(1957)</p>	<p>3.23 日本三協会から文部省に対し、「小・中学校における柔・剣・弓道奨励に関する要望書」を提出した。</p> <p>5.5 全日本柔道選手権大会(蔵前国技館) 世界王者の夏井昇吉(東北)が初の日本一、②曾根康治(東京)、③山舗公義(近畿)、橋元 親(近畿)。</p> <p>5.6 講道館審議会において、新しい「昇段基準に関する内規」制定(実施は同年9月1日)。</p> <p>5.6 「講道館柔道試合審判規程」改正 副審の権限強化。第24条「主審の宣告に副審の異議のあった場合、申し出ることが出来る」を改正では、「副審は主審の宣告について意見があった場合、申し出なければならぬ」など。</p> <p>7.7 第6回全日本学生柔道優勝大会(東京体育館) ①明治大、②早稲田大、③拓殖大、慶応義塾大。</p> <p>7.14 第7回全国実業団柔道大会(講道館) 団体:有段者・①東洋レーヨン、②倉敷レイヨン。段外者・①三菱レイヨン、②味の素。</p> <p>7.22 第31回西日本高校柔道選手権大会(福岡スポーツセンター) ①嘉穂(福岡)、②鹿児島商業(鹿児島)、③久留米商業(福岡)、山鹿(熊本)。</p>	

年	全柔連の歴史・国内の柔道界	世界の柔道及び日本の成績
	<p>8.3 第6回全国高等学校柔道大会(天理市) 団体: -4 ①報徳学園(兵庫)、②嘉穂(福岡)、③鹿児島商業(鹿児島)、盈進(広島)。従来、試合場の広さは設備を考慮し付則で32畳とされていたが、今大会より改めて50畳とした。</p> <p>8.25 第2回全日本新人選抜柔道選手権大会(福岡スポーツセンター) 九州柔道協会主催。松下三郎(日本大)が前年の覇者・神永昭夫を降し優勝。③古賀正躬(天理大)、長谷川博之(東京教大)。</p> <p>9.30 第8回全日本東西対抗柔道大会(福岡スポーツセンター) 東西各25選手(所属都道府県から必ず1名出場)による勝ち抜き試合。初の引分。</p> <p>10.6 全国警察柔道大会(東京体育館) 団体:①愛知が初制覇、②京都。個人:西岡 弘(大阪)、石橋弥一郎(福岡)が延長3回優劣つかず両者優勝。③榎本繁広(皇宮)。</p> <p>10.26 第12回国民体育大会柔道競技(静岡市) 競技-28 別総合・①大阪。一般・①東京、②京都。高校・①福岡、②香川。</p> <p>11.9 第9回全日本学生東西対抗柔道試合(大阪府立体育会館) 東軍、不戦3人で連勝。</p> <p>11.10 第9回全日本学生柔道選手権大会(大阪府立体育会館) 松下三郎(日本)が2度目のV、②神永昭夫(明治)、③徳山 操(明治)、渡辺喜三郎(中央)。</p> <p>11.11 第6回全国青年大会柔道競技(講道館) 団体: -12 延岡市。軽量級・大谷武道(大阪)、中量級・鈴木五月昭(愛媛)、無差別・暮石征治(愛知)がそれぞれ優勝。</p> <p>11.23 第5回全日本産業柔道大会(講道館) 1部・石炭部門、2部・鉄鋼部門が優勝。</p>	
昭和33 (1958)	<p>3.25 新築講道館落成 水道橋から春日町へ移転。稽古は31日から、試合は4月6日の東京都柔道選手権が皮切り。全柔連本部も新講道館に移った。</p> <p>5.3 嘉納師範二十年祭 挙行</p> <p>5.5 全日本柔道選手権大会(東京体育館) 曾根康治(東京)が初優勝。②山舗公義(近畿)、③小田雄三(近畿)、河野雅英(近畿)。</p> <p>6.29 第8回全国実業団柔道大会(大阪府立体育会館) 団体:有段者・①八幡製鉄、②東洋レーヨン。段外者・①三菱レイヨン、②丸善石油。</p>	<p>5.25 第3回アジア競技大会(講道館) 柔道はオープン競技。フィリピン、中国、韓国から計13名、日本選手17名の合計30名による紅白点取り試合は7-4で紅軍が勝った。全国からの25歳以下の新鋭16名による全日本選抜優勝試合は決勝で渡辺喜三郎(中国)が岩田兵衛(近畿)を判定で破って優勝した。③神永昭夫(東京)、太田伸一(九州) この大会は、6年後の東京オリンピック招致を確定させるためのデモンストレーションでもあった。</p>

年	全柔連の歴史・国内の柔道界	世界の柔道及び日本の成績
	<p>7.6 第7回全日本学生柔道優勝大会(東京体育館) ①明治大、②天理大、③日本大、関西大。</p> <p>7.21 第32回九州近県高校柔道選手権大会(福岡スポーツセンター) ①嘉穂(福岡)=V2、②久留米商業(福岡)、③南筑(福岡)、福岡商業(福岡)。</p> <p>8.9 第7回全国高等学校柔道大会(岐阜市) 団体: -10 ①東海(愛知)、②嘉穂(福岡)、③慶応義塾(神奈川)、盈進(広島)。</p> <p>10.5 世界柔道選手権日本代表決定大会(福岡スポーツセンター) 決勝で曾根康治(東京)が山舗公義(京都)を右大外刈で降して優勝。3位決定戦は神永昭夫(東京)が重松正夫(福岡)から判定を奪って勝ち、曾根、山舗、神永が代表に。</p> <p>10.11 全国警察柔道大会(東京体育館) 団体A:①大阪、②警視庁。団体B:①秋田、②徳島。選手権:養浦登司広(富山)、千葉時男(警視庁)が延長3回の末勝敗決せず、両者優勝。③江原滋夫(埼玉)。</p> <p>10.20 第13回国民体育大会柔道競技(上市市) 競技別総合・①京都。一般・①大阪、②熊本。高校・①愛知、②神奈川。</p> <p>11.7 第7回全国青年大会柔道競技(講道館) 団体: -8 名古屋市。軽量級・高橋伸一(栃木)、中量級・菊地章三(滋賀)、大音尚士(福岡)、無差別・嶋川聰(愛知)、岡本 学(奈良)がそれぞれ優勝。</p> <p>11.8 第10回全日本学生東西対抗柔道試合(大阪府立体育会館) 東軍が8度目の優勝。</p> <p>11.9 第10回全日本学生柔道選手権大会(大阪府立体育会館) 神永昭夫(明治)と古賀正躬(天理)が8回延長の末引分、両者優勝。③笠木大海(関西)、阿部大助(慶応義塾)。</p> <p>11.23 第6回全日本産業柔道大会(講道館) 1部、2部ともに繊維部門が優勝。</p>	<p>IOC総会のため来日中のブランデー会長はじめ、多数の委員注目の大会であった。東京五輪はまだ審議の段階で日本体育協会は、この大会を成功させるために全力を傾けていた。</p> <p>11.3 第2回世界柔道選手権大会(東京体育館) 18ヶ国39名が参加。予想通りに日本選手の圧勝。曾根康治(富士製鉄)が初優勝。②神永昭夫(明治大)、③山舗公義(京都府警)。日本人審判員:三船久蔵、会田彦一、宇土虎雄、緒方久人、神田久太郎、工藤一三、鈴木潔治、高垣信造、高木喜代市、高橋喜三郎、浜野正平、大蝶美夫、菊池揚二、小谷澄之、曾根幸蔵、高橋秀山、伊達義行、久永貞男、松崎太平、森下 勇。</p> <p>12.1 国際親善柔道大会(講道館) 選手各国混合の紅白試合(22組)と9組の特選試合が行われた。</p>
<p>昭和34 (1959)</p>	<p>5.5 全日本柔道選手権大会(東京体育館) 学生・猪熊 功(関東)が初出場で日本一、②神永昭夫(東京)、③渡辺喜三郎(東京)、高橋 彰(東京)。</p> <p>7.5 第8回全日本学生柔道優勝大会(東京体育館) ①天理大、②明治大、③早稲田大、日本大</p> <p>7.12 第9回全日本実業団対抗柔道大会(講道館) 1部・①富士製鉄、②東洋レーヨン。2部・①新三菱重工、②富士製鉄広畑。</p>	<p>5.26 オリンピック・東京大会が決定 IOC第55回総会(ミュンヘン)において、第18回夏季大会の開催都市が東京に決定した。</p>

年	全柔連の歴史・国内の柔道界	世界の柔道及び日本の成績
	<p>7.28 第33回金鷲旗争奪高校柔道大会(福岡スポーツセンター) ①南筑(福岡)、②山鹿(熊本)、③大濠(福岡)、久留米商業(福岡)。</p> <p>8.8 第8回全国高等学校柔道大会(福岡市) ①南筑(福岡)、②盈進(広島)、③嘉穂(福岡)、天理(奈良)。</p> <p>9.27 第9回全日本東西対抗柔道大会(大阪市中央体育館) 各軍30選手編成の点取り試合に変更。11-11で引分。</p> <p>10.11 全国警察柔道大会(東京体育館) 団体A:①警視庁、②秋田。団体B:①富山、②兵庫。選手権:①河野雅英(大阪)、②横田和孝(徳島)、③坂口金造(警視庁)。</p> <p>10.26 第14回国民体育大会柔道競技(東京) 高校、中学等のレベルアップには教員の強化が重要であるとして教員の部が新設され、各9地区予選通過の代表1府県と主催県が出場。競技別総合・①東京。一般・①滋賀、②大阪。教員・①東京、②埼玉。高校・①福岡、②千葉。</p> <p>11.12 第8回全国青年大会柔道競技(講道館) 団体:福岡市。軽量級・子安武雄(滋賀)、中量級・田中靖人(滋賀)、無差別・刀爾政弘(滋賀)がそれぞれ優勝。</p> <p>11.14 日本女子柔道会 発足</p> <p>11.14 第11回全日本学生東西対抗柔道試合(大阪府立体育会館) 東軍が不戦3人で4連勝。</p> <p>11.15 第11回全日本学生柔道選手権大会(大阪府立体育会館) ①重松正成(明治)、②古賀 武(日本)、③猪熊 功(東京教育)、田中章雄(明治)。</p> <p>11.23 第7回全日本産業柔道大会(講道館) 1部・鉄鋼部門、2部・繊維部門が優勝。</p> <p>12.23 日本志道会 発足 日本三道会に日本相撲連盟より加入申請があり、名称を改め加入を承認した。</p>	<p>12.21 アメリカ大使館の柔道場開き 国内初の外国人専用道場。</p>
昭和35(1960)	<p>4.30 全日本柔道選手権大会(東京体育館) 神永昭夫(指定)が猪熊 功(指定)に雪辱し初の王者、③重松正成(指定)、小田雄三(指定)。</p> <p>6.18 第9回全日本学生柔道優勝大会(東京体育館) ①天理大=V2、②日本大、③中央大、明治大。本年より、選手の配列は段位順によらず自由となった。</p> <p>7.10 第10回全日本実業団体柔道大会(大阪府立体育会館) 1部・2部ともに東洋レヨンが優勝。1部・②帝国人絹。2部・②三菱レイヨン大竹。</p>	<p>2.18 外務省派遣柔道使節団 国際親善のための柔道使節団として団長・川村禎三、大澤慶己、神永昭夫がフランス、ベルギー、西ドイツ、スイス、カイロ、インド、マニラ等の各地で柔道の指導を行い4月に帰国。</p> <p>5. 柔道をオリンピック種目へ IJF嘉納会長は、IOC委員東 龍太郎東京都知事、高石真五郎IOC委員と協議のすえ、IOCプランデージ会長宛に「柔道を正式種目に採用してほしい」との申請書を送ると共に、東京五輪組織委員会にも「正式種</p>

年	全柔連の歴史・国内の柔道界	世界の柔道及び日本の成績
	<p>7.26 第34回金鷲旗争奪高校柔道大会 (福岡スポーツセンター) ①久留米商業 (福岡)、②九州学院 (熊本)、③八代商業 (熊本)、大濠 (福岡)。</p> <p>8.6 第9回高等学校柔道大会 (札幌市) ①久留米商業 (福岡)、②秋田商業 (秋田)、③大谷 (京都)、盈進 (広島)。</p> <p>8.27 第1回全日本招待選抜柔道大会 (福岡スポーツセンター) 猪熊 功 (神奈川) が延長4回の末、岩田兵衛 (滋賀) を降し優勝。③熊本誠一 (奈良)、大内賢一 (東京)。</p> <p>9.25 第10回全日本東西対抗柔道大会 (富山市) 各軍30選手編成の点取り試合。西軍、7度目の優勝。</p> <p>10.8 全国警察柔道大会 (東京体育館) 団体A:①大阪、②京都。団体B:①兵庫、②北海道。選手権:①村田利行 (徳島)、②小田雄三 (京都)、③河崎昌弘 (警視庁)。</p> <p>10.24 第15回国民体育大会柔道競技 (山鹿市) 競技別総合・①京都。一般・①大阪、②京都。教員・①京都、②大分。高校・①東京、②千葉。</p> <p>10.29 嘉納師範生誕百年式並びに銅像除幕式 挙行</p> <p>11.5 第12回全日本学生東西対抗柔道試合 (大阪府立体育会館) 東軍、不戦3人で5連勝。</p> <p>11.6 第12回全日本学生柔道選手権大会 (大阪府立体育会館) 重松正成 (明治) が史上初の連覇、②田中章雄 (明治)、③山岸 均 (東洋)、古賀 武 (日本)。</p> <p>11.9 第9回全国青年大会柔道競技 (講道館) 団体:名古屋市。軽量級・松原隆男 (山口)、中量級・氏内辰秀 (滋賀)、無差別・川崎勝幸 (愛知) がそれぞれ優勝。</p> <p>11.18 全日本実業団柔道連盟が発足 全国実業団体育連盟の柔道部会を発展的解消し結成。</p> <p>11.23 第8回全日本産業柔道大会 (講道館) 1部、2部ともに繊維部門が優勝。</p>	<p>目として採用された場合、東京大会で実施してもらいたい」旨の請願書を提出した。</p> <p>6.2 日仏学生柔道協会 発足</p> <p>6.24 オリンピック東京大会の種目答申 五輪組織委員会は開催種目について、来る8月に柔道が正式種目に認められれば、IOC決定の21種目とすることとした。</p> <p>8.22 柔道がオリンピック正式種目に決定 第57回IOC総会 (ローマ) において、柔道をオリンピック正式種目に加え、東京大会で実施することが決定された (反対2票のみ)。</p> <p>12.21 東京五輪は柔道を加えた18種目 組織委員会で、実施種目を柔道を含めた18種目に変更した。</p>
<p>昭和36 (1961)</p>	<p>2.4 全柔連専門委員会発足 理事会において、東京オリンピックに備えて「柔道オリンピック審議会」及び「柔道オリンピック特別委員会」の設置を決定。特別委員会は技術強化委員会、競技委員会、渉外広報委員会の3つの専門委員会からなる。</p> <p>3.20 「講道館柔道試合審判規定」の適用 (準改正) (1)試合場、その他をメートル法に。(2)寝技に移る時の条件を緩やかに。(3)「警告」と「技あり」の「総</p>	

年	全柔連の歴史・国内の柔道界	世界の柔道及び日本の成績
	<p>合勝」を認めた。(4)禁止事項を改めた。(5)反則の判定の基準を設けた「指導」「注意」「警告」「反則負」。(6)宣告の際、ゼスチャーを示すとして、「一本」「技あり」「抑え込み」その他の動作を示した。など。</p>	
	<p>4.8 全柔連専門委員会 柔道オリンピック技術強化委員会に、強化方法小委員会と指導者養成小委員会を設置。</p>	
	<p>4.11 東京運動記者クラブに柔道記者会が発足</p>	
	<p>4.29 全日本柔道選手権大会(東京体育館) 神永昭夫-30 (指定)対猪熊 功(指定)の3年連続の決勝、神永が連覇。③山岸 均(指定)、田中章雄(指定)。</p>	
	<p>5.28 第1回高松宮杯争奪全日本実業団東西対抗柔道大会(大阪市) 東軍が不戦1人で優勝。</p>	
	<p>6.6 国会議員柔道連盟 発足 会長・正力松太郎。衆参議員89名。</p>	
	<p>6.11 全日本柔道体重別選手権大会(大阪市中央体育館) 大阪府柔連主催・全柔連後援。世界選手権に無差別と共に体重制も採用される見通しとなり、これに備えて大阪府柔連が初の全国レベルの体重別大会の開催に踏み切った。軽量級(63kg未満)・岩田兵衛(近畿)、中量級(80kg未満)・関 勝治(関東)、重量級(80kg以上)・山岸 均(北海道)がそれぞれ優勝。</p>	<p>5.30 訪欧柔道使節団 嘉納履正・全柔連会長以下早川 勝、中山正善、川村禎三、古賀 武、遠苧信一の柔道使節団が、アテネIOC総会を機会に各国へオリンピック柔道の協力要請、PRのために渡欧(～6/29)。</p>
	<p>6.18 第10回全日本学生柔道優勝大会(東京体育館) ①明治大、②中央大、③日本大、天理大。</p>	<p>6.21 東京五輪に柔道採用 アテネの第58回IOC総会にて、オリンピック・東京大会正式種目を日本原案の柔道を含む18種目に、近代五種、カヌーを加えた20種とすることを正式に決定した。</p>
	<p>7.16 第11回全日本実業団体柔道大会(高岡市) 1部・①東洋レーヨン、②帝国人絹。2部・①富士製鉄、②東洋レーヨン。</p>	
	<p>7.28 第35回金鷲旗争奪高校柔道大会(福岡スポーツセンター) ①山鹿(熊本)、②久留米商業(福岡)、③鎮西(熊本)、③南筑(福岡)。</p>	
	<p>8.5 第10回全国高等学校柔道大会(鳥取市) 団体：①南筑(福岡)、②秋田商業(秋田)、③大谷(京都)、盈進(広島)。個人は田畑俊弘(鎮西)が初代王者に、②関根 忍(那珂湊)、③石井浅生(金沢)、岡野 功(竜ヶ崎一)。</p>	
	<p>8.10 東京オリンピック強化合宿 強化合宿を講道館にて実施。実業・警察・学生・高校から選抜された111名が参加。柔道強化4ヵ年計画実施。東京五輪まで強化合宿は、4月の関東・東京地区を皮切りに計58回行われ、参加選手は17,603名、コーチは4,732名(いずれも延べ人数)。</p>	

年	全柔連の歴史・国内の柔道界	世界の柔道及び日本の成績
	<p>9.3 世界柔道選手権日本代表決定大会 (福岡スポーツセンター) ①曾根康治 (東京)、②山岸 均 (北海道)、③重松正成 (東京) のいずれも指名選手が上位に。代表は、負傷欠場により特別推薦の神永昭夫、曾根、山岸、重松。補欠に古賀 武。</p> <p>9.23 第11回全日本東西対抗柔道大会 (高知市) 各軍30選手編成の点取り試合。西軍1点差で連勝。</p> <p>10.9 国民体育大会柔道競技 (男鹿市) 競技別総合・-11 ①大分。一般・①滋賀=V2、②東京。教員・①大分、②広島。高校・①茨城、②福岡。</p> <p>10.22 全国警察柔道大会 (東京体育館) 団体A:①愛知、②京都。団体B:①皇宮、②富山。選手権:①村田利行 (徳島)=V2、②松永満雄 (大阪)、③荒金 実 (大阪)。</p> <p>11.3 三船久蔵十段が文化功労者として顕彰された</p> <p>11.4 第13回全日本学生東西対抗柔道試合 (大阪府立体育会館) 東軍、不戦2人で6連勝。</p> <p>11.5 第13回全日本学生柔道選手権大会 (大阪府立体育会館) ①古賀 武 (日本)、②田中章雄 (明治)、③高田誠之助 (明治)、佐藤 治 (明治)。</p> <p>11.8 第10回全国青年大会柔道競技 (講道館) 団体:-9 大牟田市。軽量級・徳田国弘 (熊本)、中量級・藤沼正信 (茨城)、無差別・阿部恵一 (東京) がそれぞれ優勝。</p> <p>11.23 第9回全日本産業柔道大会 (講道館) 1部・鉄鋼、2部・繊維部門が優勝。</p> <p>12.16 “日本武道館建設”へ 財団法人「日本武道館」の設立発起人会が開かれた。東京オリンピック開催に合わせて武道の総合的大殿堂建設を期す。</p>	<p>12.1 東京五輪柔道は重量別は3階級に IJF第2回-3 総会 (パリ) において、東京オリンピック柔道種目は無差別と3階級の体重別を併用し、エントリーは各種目につき2人以内、合計4人までとすることを決定。また、嘉納会長の再選と川村禎三・スポーツ理事を選出。</p> <p>12.2 第3回世界柔道選手権大会 (パリ) 「日本柔道パリで散る」。期待の神永昭夫 (富士製鉄) 等、日本代表3選手が相次いでヘーシンク (オランダ) に敗れる。決勝はヘーシンクが曾根康治 (富士製鉄) を袈裟固で降し、外国人として初優勝。③古賀 武 (日本大)。日本選手団: 団長・竹村茂孝、本部役員・広田洋三、監督・松本芳三。日本人審判員: 夏井昇吉、吉松義彦。</p> <p>12.3 国際親善三大陸対抗柔道大会 (パリ) アジア、アメリカ、ヨーロッパの対抗で行われ、ヨーロッパが2勝で優勝、アジア (山岸 均、重松正成) はアメリカに勝ち2位。</p>
<p>昭和37 (1962)</p>	<p>2.15 全日本柔道少年団 結成</p> <p>3.12 「講道館柔道試合審判規程」の適用 (準改正) 規程の解釈、取扱いの統一を行った。宣告された抑え込みだけでなく、寝技全般でも場外に出そうな場合は「そのまま」で場内に引き入れることとした。主審及び副審2名の判定がいずれも異なる場合は主審の判定によって決するを、三者合議してもよいとした。など。</p> <p>4.22 第1回東京関東学生体重別選手権大会 (講道館) 学連初の体重別大会。五輪と同じ体重制で実施。</p> <p>4.28 全日本柔道選手権大会 (東京体育館) 竹内善徳 (指定) が初優勝。②長谷川博之 (指定)、③佐藤和久 (東海)、松永満雄 (指定)。</p>	

年	全柔連の歴史・国内の柔道界	世界の柔道及び日本の成績
	<p>5.30 全日本実業柔道連盟発会式及び総会 全日本産業柔道連盟と全日本実業団柔道連盟が統合して発足。</p> <p>6.10 第2回全日本実業団東西対抗柔道大会(日大講堂) 引分。</p> <p>6.16 第11回全日本学生柔道優勝大会(東京体育館) -17 明治大が連覇、②日本大、③中央大、④天理大。</p> <p>7.15 第12回全日本実業団体柔道大会(米子市) 1部・①富士製鉄、②倉敷レイヨン。2部・①新三菱重工名古屋、②東洋レーヨン。</p> <p>7.19 全柔連、審判委員選考委員会を設置 主催の全国的大会審判委員選考のため、13名に委嘱。</p> <p>7.28 第36回金鷲旗争奪高校柔道大会(福岡スポーツセンター) ①南筑(福岡)、②佐賀商業(佐賀)、③山鹿(熊本)、久留米商業(福岡)。</p> <p>8.4 第11回全国高等学校柔道大会(新潟市) 団体: -6 天理(奈良)、②安房(千葉)、③山鹿(熊本)、報徳学園(兵庫)。個人:軽量級・①林田克己(久留米商業)、②佐野 始(身延)。重量級・①青井 尊(大阪工大)、②平尾勝司(西海)。今大会より、個人試合が2階級制となるとともに、減点法を採用した。</p> <p>8.28 「国技の総会館建設」が衆議院で満場一致で可決 東京オリンピック柔道競技は水泳競技終了後にプール上に仮設される会場での実施案に反対し、武道会館建設議員連盟が会場建設運動を展開していた。</p> <p>9.23 第12回全日本東西対抗柔道大会(山口市) 各軍30選手編成の点取り試合。西軍、1点差で逃切る。</p> <p>10.12 全国警察柔道大会(東京体育館) 団体A:①警視庁、②大阪。団体B:①富山、②鳥根。選手権:①村田利行(徳島)=V3、②河野雅英(大阪)、③吉沢義照(京都)。</p> <p>10.22 第17回国民体育大会柔道競技(児島市) 競技 -24 別総合・①福岡。一般・①東京、②神奈川。教員・①岡山、②福岡。高校・①福岡、②熊本。</p> <p>11.3 第14回全日本学生東西対抗柔道試合(大阪府立体育会館) 西軍、不戦2人で7年ぶりの優勝。</p> <p>11.4 第14回全日本学生柔道選手権大会(大阪府立体育会館) ①朝田紀明(明治)、②坂口征二(明治)、③松阪 猛(近畿)、岡野 功(中央)。</p> <p>11.15 第11回全国青年大会柔道競技(講道館) 団体: -16 足立区。軽量級・岡村義晃(東京)、中量級・橋村</p>	<p>9.1 ジャカルタ国際親善柔道大会(インドネシア) -3 第4回アジア大会において柔道は主催国インドネシアの決定で正式種目として採用されず、同国柔連がアジア大会とは別に開催した。日本団体優勝。個人:①高田誠之助、②長谷川博之、③古賀武。</p>

年	全柔連の歴史・国内の柔道界	世界の柔道及び日本の成績
	<p>国男(佐賀)、無差別・宝満千昭(福岡)がそれぞれ優勝。</p> <p>11.17 講道館創立80周年記念式典 挙行</p> <p>11.18 講道館80周年記念全日本柔道体重別選手権大会(東京体育館) 軽量級・①芳垣修二、②岩田兵衛、中量級・①松阪 猛、②関 勝治、重量級・①長谷川博之、②竹内善徳。</p> <p>11.23 第10回全日本産業柔道大会(講道館) 1部、2部ともに繊維部門が優勝。</p>	
<p>昭和38 (1963)</p>	<p>1. 講道館柔道衣規格 改定</p> <p>4.28 全日本柔道選手権大会(東京体育館) 猪熊-29 功(指定)が2度目の日本一、②長谷川博之(指定)、③刀禰政弘(近畿)、村井正芳(東京)。</p> <p>6.2 第13回全日本実業団対抗柔道大会(名古屋市) 1部・①東洋レーヨン、②博報堂。2部・①新三菱重工名古屋、②東洋レーヨン三島。</p> <p>6.15 第12回全日本学生柔道優勝大会(東京体育館)-16 明治大が3連覇、②天理大、③日本大、④早稲田大。</p> <p>6.23 第1回全警察・全実業・全学生対抗柔道試合(講道館) 軽量級(68kg未満)5名、中量級(80kg未満)7名、重量級(80kg以上)10名の計22名で点取り試合。全実業が10-6、6-3と全警察、全学生をそれぞれ破って優勝。</p> <p>7.27 第37回金鷲旗争奪高校柔道大会(福岡スポーツセンター) ①福岡電波(福岡)、②南筑(福岡)、③柳川商業(福岡)、鎮西(熊本)。今大会より、優勝校に文部大臣賞が授与された。</p> <p>8.3 第12回高等学校柔道大会(松山市) 団体:天理-5 (奈良)が史上初の連覇、②安房(千葉)、③東海(愛知)、前橋商業(群馬)。個人:軽量級・①河野義光(今治南)、②関根正幸(秩父)。重量級・①近谷忠行(函館有斗)、②篠巻政利(安房)。</p> <p>9.27 日本武道館、工事に着手 昭和39年9月完成予定。東京オリンピック柔道会場は、既定の水泳会場から変更へ。</p> <p>9.29 第13回全日本東西対抗柔道大会(静岡市) 従来の所属都道府県から1名を含む制限を廃し、東西各軍ともベスト25選手による勝ち抜き試合となった。東軍が11年ぶりに優勝。</p> <p>10.9 全国警察柔道大会(東京体育館) 団体A:①警視庁=V2、②大阪。団体B:①群馬、②熊本。個人:軽量級・富士岡 登(栃木)、中量級・井上利治</p>	<p>2.19 日ソ対親善柔道試合 日ソ対抗アマチュアレスリング試合のため来日したソ連チームと共に、ソ連サンボ協会の柔道選手4名も帯同。前橋・神戸・横浜・東京で試合を行い、2勝1敗1分で辛勝。</p> <p>8.11 学生柔道団訪ソ 国会議員柔道連盟の斡旋で-9.7 浜野正平団長以下、役員、選手10名がソ連へ。トビリシ等の3会場で全ソチームと対戦した。</p> <p>10.12 東京国際スポーツ大会(両国日大講堂) 4-13 階級とも制覇。軽量級・①重岡隆文(東京教育大)、②中谷雄英(明治大)、③松田博文(関西大)、岩田兵衛(東レ)。中量級・①岡野 功(中央大)、②金 義泰(韓国)、③遠苧信一(天理</p>

年	全柔連の歴史・国内の柔道界	世界の柔道及び日本の成績
	<p>(大阪)、重量級・村田利行(徳島)=V4、がそれぞれ優勝。</p> <p>10.20 第2回全日本実業団東西対抗柔道大会(大阪市中央体育館) 不戦4人で東軍の優勝。</p> <p>10.28 第18回国民体育大会柔道競技(徳山市) 競別総合・①福岡。一般男子・①東京=V2、②兵庫。教員男子・①福岡、②広島。高校男子・①福岡=V2、②秋田。</p> <p>11.9 第15回全日本学生東西対抗柔道試合(大阪府立体育会館) 東軍、6人を残して優勝。</p> <p>11.9 第15回全日本学生柔道選手権大会(大阪府立体育会館) 初めて体重別選手権制を採用。軽量級・花島紀久雄(拓殖)、中量級・遠藤信一(天理)、重量級・石原賢信(明治)、無差別・白崎淳悦(日本)がそれぞれ優勝。</p> <p>11.14 第12回全国青年大会柔道競技(講道館) 団体：福岡。軽量級・姫野有文(長崎)、中量級・増本 清(広島)、無差別・森川重俊(神奈川)がそれぞれ優勝。</p> <p>11.23 第11回全日本産業柔道大会(講道館) 繊維部門が連覇。</p>	<p>大)、松阪 猛(大阪府警)。重量級・①重松正成(旭化成)、②中野顕治(東レ)、③坂口征二(明治大)、前島延行(新三菱重工)。無差別・①村井正芳(明治大)、②高田誠之助(丸善石油)、③村田利行(徳島県警)、松本成四郎(天理大教)。</p> <p>10.17 メキシコ五輪では柔道は実施せず 第60回IOC総会(バーデンバーデン)において、オリンピック・メキシコ大会で実施する競技種目を憲章で定められている22種目のうちの18種目とすることを決め、投票の結果、柔道、ハンドボール、バレーボール、洋弓の4種目の除外を決定。</p> <p>12. IJF内に、柔道のオリンピック復活委員会を設置 積極的な活動を展開。</p>
昭和39(1964)	<p>2.5 東京五輪会場に日本武道館 9月15日竣工予定で昼夜兼行の突貫工事を進めている日本武道館に対し、五輪組織委員会より柔道会場として使用したい旨、正式に申し入れがあった。</p> <p>4.25 全日本柔道選手権大会(東京体育館) 神永昭夫(指定)が3度目の制覇。②坂口征二(指定)、③長谷川博之(指定)、猪熊 功(指定)。</p> <p>5.24 第14回全日本実業団対抗柔道大会(姫路市) 1部・①富士製鉄、②東洋レーヨン。2部・①新三菱重工名古屋、②東洋レーヨン。</p> <p>6.7 第19回国民体育大会柔道競技(加茂市) 競別総合・福岡=V3。一般男子・①大阪、②東京。教員男子・①福岡=V2、②、北海道。高校男子・①福岡・=V3、②東京。</p> <p>6.20 第12回全日本学生柔道優勝大会(東京体育館) 明治大が史上初の4連覇。②早稲田大、③東洋大、日本大。</p> <p>6.28 第2回全警察・全実業・全学生対抗柔道試合(講道館) 軽量級、中量級各8名、重量級9名の計25名で点取り試合。全学生が全警察を10-3、全実業を7-4と圧倒して優勝。</p>	<p>3.2 第1回モスクワ国際柔道大会 軽量級・中谷雄英-3(明治大)、中量級・岡野 功(中央大)、重量級・猪熊 功(順天堂大教)の3階級全てに優勝。</p> <p>4.26 欧州柔道選手権大会 ヘーシンク(オランダ)が重量級と無差別に連続優勝。</p>

年	全柔連の歴史・国内の柔道界	世界の柔道及び日本の成績
	<p>7.25 第38回金鷲旗争奪高校柔道大会 (九電記念体育館) ①南筑(福岡)、②福岡電波(福岡)、③嘉穂(福岡)、九州学院(熊本)。</p> <p>8.1 第13回全国高等学校柔道大会(伊勢市) 団体:①大谷(京都)、②国東(大分)、③鹿児島商業(鹿児島)、砺波(富山)。個人:軽量級・仁木健三(和歌山工業)、中量級・河野義光(今治南)、重量級・須磨周司(南筑)がそれぞれ優勝。</p> <p>10.3 日本武道館開館式 挙行</p> <p>10.6 佐村嘉一郎十段 逝去(84) 13日講道館葬。</p> <p>10.10 日本体育協会初代会長・嘉納治五郎師範のレリーフ除幕式 国立競技場正門前広場にて挙行。</p> <p>11.7 第16回全日本学生東西対抗柔道試合(大阪府立体育会館) 東軍、不戦6人で連勝。</p> <p>11.8 第16回全日本学生柔道選手権大会(大阪府立体育会館) 軽量級・松田博文(関西)、中量級・関根 忍(中央)、重量級・上野武則(明治)、無差別・坂口征二(明治)がそれぞれ優勝。関根は東軍の補欠であったが、岡野 功(中央)が負傷欠場のための繰り上げ出場であった。</p> <p>10.10 全国警察柔道大会(日本武道館) 団体A:①警視庁=V3、②大阪。団体B:①福岡、②北海道。個人:軽量級・生津隆志(福岡)、中量級・山地隆雄(富山)、重量級・松永満雄(高知)がそれぞれ優勝。</p> <p>11.14 第12回全日本産業柔道大会(名古屋市) 織維部門が3連覇。</p> <p>11.15 第4回全日本実業団東西対抗柔道大会(愛知県体育館) 引分。</p> <p>11.19 第13回全国青年大会柔道競技(講道館) 団体:仙台市。軽量級・広瀬誠一(滋賀)、中量級・秋元宗武(宮城)、無差別・峰 重幸(大阪)がそれぞれ優勝。</p> <p>11.23 高等学校教員資格試験(柔道他)が初めて実施された。</p> <p>12.2 三船久蔵十段、逝去(82) 昭和40年2月2日大道場において、五人目の講道館葬を挙行。</p>	<p>10.17 IJFの主導権は欧州へ IJF理事会(東京)において、(1)本部を東京(講道館)からパリへ移す。(2)会長は理事会の代表者とする。(3)各加盟国で与えられた段位のみを公認する。ことなどを内容とする新しい規約が採決された。</p> <p>10.20 オリンピック・東京大会(日本武道館) 第1日-23 目の軽量級は中谷雄英(明治大)が5試合全て一本勝ちで金メダル。2日目の中量級・岡野 功(中央大)、3日目の重量級・猪熊 功(順天堂大教)も優勝し、日本は3階級制覇。最終日、無差別は神永昭夫(富士製鉄)とヘーシンク(オランダ)の世紀の対決。神永は予選でヘーシンクと顔を合わせ、3年前のパリ世界選手権の雪辱に燃えたが僅差で敗北。敗者復活戦にまわり、勝ち上がった決勝でも袈裟固に極められ屈し、銀メダル。</p> <p>日本選手団:監督・松本市(天理大教) 日本人審判員:浜野正平、小谷澄之、神田久太郎、久永貞男、菊池揚二、阿部信文、山本 博、広瀬 巖、夏井昇吉。</p> <p>国際親善柔道大会 25・26日尼崎市、27日天理大学、29日福岡九電体育館、30日愛知県体育館、11月1日仙台市にて行われた。</p>
昭和40(1965)	<p>5.1 全日本柔道選手権大会(日本武道館) ①坂口征二(東京)、②松阪 猛(近畿)、③古賀 武(九州)、前田行雄(東京)。</p> <p>5.3 全柔連理事会・評議員会 財務、講道館柔道試合規定、審判員選考、アマチュア審査、強化、国際、</p>	<p>日独柔道対抗試合(ベルリン) 7勝1敗2分で優勝。</p> <p>メキシコ五輪では柔道は実施せず 第63回IOC総会(マドリッド)にて、柔道競技の復活について協議されたがプログラム変更に必要な3分の2の</p>

年	全柔連の歴史・国内の柔道界	世界の柔道及び日本の成績
	<p>国体の7専門委員会の設置を構成を決定した。また、「IJFの一部執行部」の独断的な運営について、「強く反省を求め」「次第によっては協力できない」という決議を行った。</p> <p>6.19 第14回全日本学生柔道優勝大会（東京体育館） -20 拓殖大が初V、②明治大、③近畿大、天理大。</p> <p>6.27 第3回全警察・全実業・全学生対抗柔道試合（警視庁武道館） 軽量級5名、中量級6名、重量級9名の計20名で点取り試合。全学生は全実業を4-4、全警察を9-7で辛勝し連続優勝。</p> <p>7.11 第15回全日本実業団対抗柔道大会（横浜市） 1部・①三菱重工名古屋、②博報堂。2部・①博報堂、②富士製鉄広畑。</p> <p>7.13 オリンピック・メキシコ大会柔道復活期成同盟 政界、財界、柔道関係者によって発足。代表は嘉納履正、石井光次郎（法相・体協会長）、永野重雄（富士製鉄社長）。8月31日の会合では、10月3日にマドリッドで開かれるIOC総会までに、柔道のメキシコ大会復活を強力に働きかけるため、原文兵衛・実行委員長を代表とする代表団を9月にヨーロッパに派遣、各国IOC委員に働きかけることを決定した。</p> <p>7.24 第39回金鷲旗争奪高校柔道大会（九電記念体育館） ①南筑（福岡）=V2、②鎮西（熊本）、③嘉穂（福岡）、福岡電波（福岡）。</p> <p>8.2 第14回全国高等学校柔道大会（熊本市） 団体：①南筑（福岡）、②天理（奈良）、③鹿児島実業（鹿児島）、鎮西（熊本）。個人：軽量級・竹本明美（東海）、中量級・堀 昌允（報徳）、重量級・西村昌樹（日大一）がそれぞれ優勝。今大会より、全国高等学校総合体育大会（インターハイ）の一環となったが、大会名称は継承されることとなった。</p> <p>9.4 日独交歓柔道試合（西ベルリン） 軽軽量級1、軽量級2、中量2、93kg以下1、93kg以上2の計8名の対抗戦。完勝の予想であったが、7勝1敗2分。</p> <p>10.3 第14回全日本東西対抗柔道大会（金沢市） 学生選手10名以上15名以内とした、東西25選手による勝ち抜き試合。不戦2人で西軍が優勝。</p> <p>10.3 第5回全日本実業団東西対抗柔道大会（広島県立体育館） 不戦1人で東軍の優勝。</p> <p>10.6 全国警察柔道大会（日本武道館） 団体A：①警視庁=V4、②大阪。団体B：①群馬、②宮城。個人：軽量級・河野親安（高知）、中量級・栗村曜似（京都）、重量級・前田行雄（警視庁）がそれぞれ優勝。</p>	<p>賛成が得られず、復活は認められず。次々回の72年大会では全種目実施に決定。</p> <p>IJF総会（リオデジャネイロ） IJF会長選挙で五大大陸中三大大陸が嘉納履正会長の再選を支持し、対立候補の無い中で、欧州柔連より「（欧州柔連の決議により）名誉会長へ」の発言あり、混乱状態の中で投票が行われ再選は否決。嘉納会長は規約上にはない名誉会長に推された（欠席のため、IJFが直接伝えることとなった）。第1回目の投票は規定数に及ばず、翌13日に新会長は欧州柔連が支持したC・Sパーマー（イギリス）に決まった。</p> <p>また、第5回世界選手権より体重別5階級と無差別の6階級制が採用されることが決定。無差別廃止の意見が強く決定しそうな情勢であったが、日本とイギリス代表が「無差別の廃止は柔道の本質に反する」と再考を求め、2回目の投票で圧倒的多数により存続が決まった。</p>

年	全柔連の歴史・国内の柔道界	世界の柔道及び日本の成績
10.25 -27	第20回国民体育大会柔道競技 (岐阜市) 競技別総合・①大阪。一般男子・①東京、②大阪。教員男子・①大阪、②愛知。高校男子・①奈良、②富山。	10.14 第4回世界柔道選手権大会 (リオデジャネイロ) -17 無差別と体重別3階級となる。軽量級は松田博文 (関西大)、中量級・岡野 功 (中央大)、重量級・ヘーシンク (オランダ)、無差別・猪熊 功 (警視庁) がそれぞれ優勝。重量級を制したヘーシンクはそのまま引退し無差別は欠場、雪辱の機会を失った。 軽量級、中量級ともに日本同士の決戦。湊谷 弘、山中園一 (以上、天理大) がそれぞれ銀メダル。 重量級・②松永満雄 (高知県警)、③坂口征二 (旭化成)。
11.6 -7	第17回全日本学生柔道選手権大会 (大阪府立体育会館) 軽量級・園田義男 (電子工業)、中量級・丸木英二 (関西)、重量級・笹原富美雄 (天理)、無差別・山本裕祥 (明治) がそれぞれ優勝。	
11.7	第17回全日本学生東西対抗柔道試合 (大阪府立体育会館) 西軍、不戦1人で4度目の優勝。	
11.11 -12	第14回全国青年大会柔道競技 (講道館) 団体：佐世保市。軽量級・実藤秀稔 (東京)、中量級・山下守彦 (佐賀)、無差別・福田 満 (佐賀) がそれぞれ優勝。	日本選手団：団長・浜野正平 (強化委員長)、監督・曾根康治 (富士製鉄)。日本人審判：松本安市 (天理大教)。
11.14	第1回全日本選抜柔道団体優勝大会 (愛知県体育館) 明治大が警視庁を降し、団体初代王者、③愛知県警、天理大。	
11.23	第13回全日本産業柔道大会 (講道館) 鉄鋼部門が優勝。	

段位は、頁の都合上割愛した。

大会記録は、講道館雑誌『柔道』各号に掲載されている大会記録を底本として、他の出版物、大会パンフレット等も参照した。各階級の名称については、平成4年度より統一された名称である「kg級」をさかのぼって使用した。

参考・引用

嘉納先生伝記編纂会 1964『嘉納治五郎』講道館
 全日本柔道連盟 1979『全日本柔道連盟創立30周年記念誌 30年の歩み』
 講道館 1988 嘉納治五郎大系別巻『柔道試合記録』本の友社
 講道館 1996 現代柔道人物叢書別巻『柔道試合記録』本の友社
 『柔道』バックナンバー各号 講道館
 『近代柔道』バックナンバー各号 ベースボール・マガジン社
 『柔道新聞』バックナンバー各号 日本柔道新聞社
 醍醐敏郎・佐藤宣践 監修 1986 激動のスポーツ40年史『戦後柔道その栄光と変遷』ベースボール・マガジン社
 ベースボール・マガジン社編 1989 激動の昭和スポーツ史16『柔道』ベースボール・マガジン社
 工藤雷介・横尾一彦 監修 1984 ゴング9月号増刊『柔道100人』日本スポーツ出版社
 財団法人日本体育協会 1965『東京オリンピック選手強化対策本部報告書』
 財団法人日本体育協会 1970『日本スポーツ百年』
 財団法人日本体育協会 1987『日本体育協会七十五年史』
 財団法人日本オリンピック委員会 1994『近代オリンピック100年の歩み』ベースボール・マガジン社
 全日本実業柔道連盟 1990『実業柔道40年の記録』日本学生柔道連盟 1992『学生柔道40年のあゆみ』
 工藤雷介『柔道新聞 縮刷版』第1～4巻 五月書房
 『朝日新聞 縮刷版』朝日新聞社
 『毎日新聞 縮刷版』毎日新聞社
 『読売新聞 縮刷版』読売新聞社
 尾形敬史・小俣幸嗣・鮫島元成・菅波盛雄 1998『競技柔道の国際化』不味堂
 竹内善徳・小俣幸嗣・尾形敬史 1999『柔道のルールと審判法』大修館書店

編集後記

中学校保健体育において武道が必修化された。新学習指導要領では次のように謳う。

「武道は、武技、武術などから発生した我が国固有の文化であり、相手の動きに応じて、基本動作や基本となる技を身に付け、相手を攻撃したり相手の技を防御したりすることによって、勝敗を競い合う楽しさや喜びを味わうことができる運動です。また、武道に積極的に取り組むことを通して、武道の伝統的な考え方を理解し、相手を尊重して練習や試合ができるようにすることを重視する運動です。」

同時に部活動が「学校教育の一環」として、初めて教育活動のなかに位置づけられた。

柔道関係者にとってはまさにダブルの朗報である。「生涯柔道」へ向けた新たな柔道人口の拡大が期待される。将来的には、全国民が一度は柔道を学ぶということもあながち夢物語ではない。

夢は尽きないが、手放して喜んでもいられない。柔道とは人間づくりでもあり、指導者のよりいっそうの資質向上が望まれよう。親方日の丸のお墨付きの上にあぐらをかいた「殿様商法」的な指導では、むしろ逆効果を招く。寄せられる期待の大きさを心して襟を正そう。

これからの指導者に必要とされるのは、柔道の教育的価値、柔道の魅力をいかに分かりやすく「伝える」技術と力量であろう。嘉納師範は「数さえこなせば分かるようになる」とされていた柔術から、「合理的に説明・理解する」柔道を創り上げた。柔道が異文化の世界で受容され、グローバルな普及をみた一因でもある。

むろん精神修養的な側面も重要であることは言うまでもないが、必修化された柔道、いわば「内なる異文化」として学ぶことになる生徒に対し、「やれば分かる」「強くなれば分かる」の一辺倒では指導者失格と言われても致し方ない。

言うは易く行うは難し

幸いなことに、柔道の科学的な側面においては、さまざまな科学的手法による豊富な研究成果が蓄積されている。可視化された指標は誰の目においても理解しやすい。この点については、我々は大いに心強い。

さて、『柔道科学研究 第14号』をお届けします。掲載論文の果実によって、柔道の魅力が少しでも多くの方に、そしてより深く広まって行くことを願ってやみません。

(渡邊昌史・天理大学)

発行日	2009年3月31日
発行者	射手矢 岬
発行	財全日本柔道連盟強化委員会情報戦略部 〒112-0003 東京都文京区春日1-16-30 講道館内 TEL 03-3818-4199 FAX 03-3812-3995
印刷	ダイコロ株式会社 〒540-6591 大阪市中央区大手前1-7-31 TEL 06-6944-6311 FAX 06-6944-6366